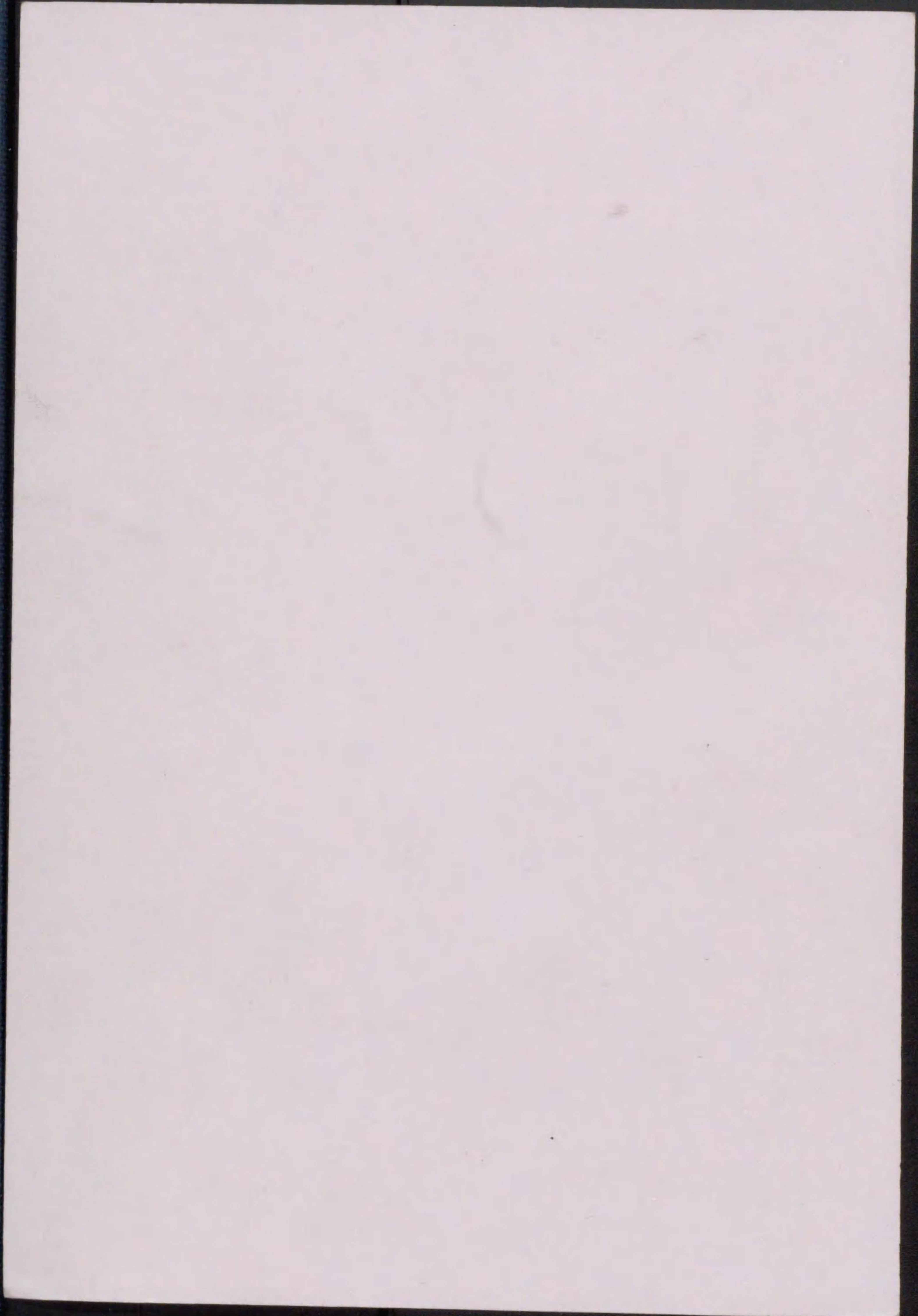


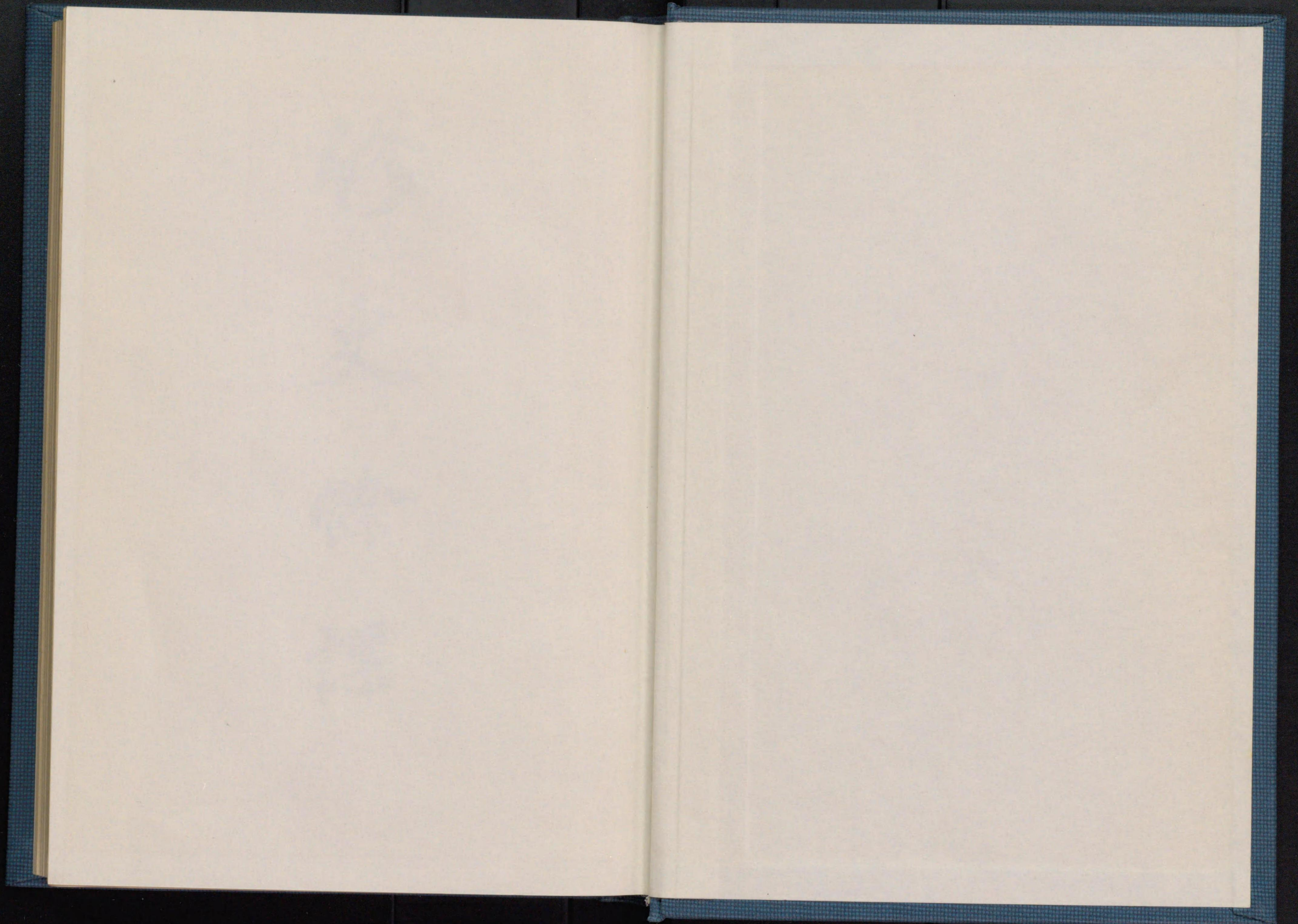
595

595-281



1200501527461





IT9A65

595
281



史

餘

課



予は科學者でない、又た科學者たることを要めない。而して特に科學的眼孔のみをもて、歴史を考察する史家には、共鳴が出來ない。正直なるところ予は斯る史家は、歴史其物の本體を、誤解してゐるものと思ふ。否な少くとも其の取扱方が間違つてゐるものと思ふ。

* * * * *

古人は柯を伐り、柯を伐る、其則遠からずと云うた。我等の歴史に對する、亦た此くありたい。乃ち實社會を以て歴史を觀、歴史を以て實社會を觀る。されば歴史は血あり、生命ある、活

ける人間社會の記録であらねばならぬ。

此の書は予が隨時隨處の講演を筆記したるもの。而して筆記の儘を、予の校定を経ずして、刊行したるもの。云はゞ何れも粗成品でなければ、未成品だ。斯るものを江湖に提供するは、不完全ながらも、尙ほ已むに優ると信ずるからだ。白狀すれば予は一の舊稿を校定するよりも、十の新稿を作るを好む。舊稿を落葉の如く抛却するは、予の弱點だ。弱點と知りつゝ、改め難き、是れ弱點の弱點たる所以。人毎に一の癖はある。寛大なる讀者、希くは勘辨せられよ。

卷末の朝鮮本目錄は、修史室の田中生の編纂にかゝる。雞肋の情禁じ難く、附載することゝした。然も日鮮文化の交通資料としては、小補無きにあらず。

昭和五年十一月念九 山王草堂に於て

蘇 峰 迂 人

居現在觀過去
居過去觀現在

修史餘課 目次

維新史の骨髄

一 緒言	一
二 予の修史事業	三
三 予の修史事業の特色	一四
四 予の修史事業の普及	二一
五 維新史とは何ぞや	二六
六 維新史の前提としての日本史の概念	三〇
七 皇室と歴史	三六
八 予の歴史観	四一
九 維新回天の偉業と孝明天皇	四六
一〇 維新史の中心思想	五〇

歴史の生命

目次

目次

一 緒言.....五七

二 歴史の使命.....六一

三 新と舊と.....六四

四 平等的觀察.....六七

五 差別的觀察.....七四

六 日本と英國との歴史的相異.....七八

七 日本と支那との歴史的相異.....八三

八 日本史の特色.....八六

維新史の前提としての日本史の概念

一 維新史とは何ぞや.....九一

二 皇室と歴史.....九七

三 皇室と國民の大運動.....九九

四 皇室と國民.....一〇六

五 外國の勢力と日本の歴史.....一一二

六 日本國民の特色.....一一四

國史研究に就ての一二の考察

七 日本史の根本思想.....一一八

一 緒言.....一二五

二 争闘時代の現時の世相.....一二七

三 ソビエト聯邦の現状如何.....一三二

四 民族自決主義.....一三五

五 美しき日本の歴史.....一三九

六 皇室と國家的大運動.....一四三

七 維新回天の偉業と孝明天皇.....一四六

八 英國の權利思想と日本の義務觀念.....一五一

九 日本國民の特性.....一五七

嘉永、安政と大正、昭和

一 緒言.....一六七

二 幕末期に於ける露英米勢力の侵迫.....一六九

三 ペルリは日本の恩人乎.....一七七

目次

四

四 幕末の外交家……………一八〇

五 松平美濃守の建白書……………一八五

六 世界大戦後の世界の動き……………一九五

七 日露戦争後に於ける有色人種の擡頭……………一九九

八 日米關係の將來とそれに對する覺悟……………二〇二

九 福岡の人傑……………二〇七

横濱と日本の文化

一 緒言……………二一一

二 予と横濱……………二一三

三 海運業の中心としての大坂……………二一六

四 ペルリ横濱に来る……………二二一

五 横濱の恩人佐久間象山と岩瀬肥後守……………二二二

六 外人宣教師と横濱の文化……………二二七

七 横濱と新聞……………二三二

八 西郷隆盛對パークス江戸攻撃談判……………二三五

學生としての吉田松陰

九 横濱を中心とせる種々の事件……………二五二

一 緒言……………二五七

二 異常なる勤勉家……………二五九

三 品行端正……………二六三

四 先輩に對する態度……………二六五

五 虚心坦懐に擇善採善す……………二六八

六 實踐的學問……………二七一

七 孝養……………二七三

八 身は家國に許す……………二七七

九 意志と感情との調和……………二七九

文祿慶長役以後日本に於ける朝鮮の感化

一 緒言……………二八五

二 日本と朝鮮との年齢……………二八七

三 朝鮮の史的環境……………二九二

目次……………五

四 壬辰役以前日本に於ける朝鮮の感化……………二九五

五 日鮮文化の交流……………三〇一

六 正平版『論語集解』臨寫本の行方……………三〇三

七 壬辰の役とは何ぞや……………三〇九

八 壬辰役後の日本の文化……………三一

九 壬辰役の戦利品としての朝鮮本……………三一四

一〇 姜沆と惺窩……………三四〇

一一 朝鮮朱子學の傳來……………三四七

一二 李退溪と崎門學派……………三五二

一三 李退溪と京學派并時習館の學風……………三五五

一四 江戸時代に於ける朝鮮本の傳來……………三六一

一五 日鮮關係の將來に對する希望……………三六四

附錄 成實堂所藏 朝鮮本目錄……………三六七



修史餘課

蘇峰學人

維新史の骨髓

一 緒言

唯今上田萬年博士より、寔に思ひがけない、御鄭重なる御挨拶を頂きまして、恐縮に堪へませぬ。私は皆様方から蘇峰會など、云ふものを作つて頂くと云ふ様な事は、夢にも考へて居た事ではございませぬ。政治家など、云ふ人々には、さう云ふもの、必要も餘程ある事と思ひますが、私は今日政治家でもなんでもない。

維新史の骨髓

唯だ先程上田先生の御話になつた通り、文章報國と云ふ事でやつて行くのでありまして、申して見ますれば、唯だ毎日書いてさへ居ればよい様なものでございませす。然しながら、それでも澤山であります。若し幸ひに私の書いたものに就いて、此所は宜しい、此所はまだ足らない、出来る事ならば斯う云ふ風にやつて貰ひたいと云ふ様に、皆様方から鑑賞して頂く——其の鑑賞は鑑みると賞するで、選舉干渉と云ふ様な意味の干渉ではないのであります——鑑賞をして頂きまして、刺戟をして頂きまして、而して且つ奨励して頂くと云ふ事は、今日日暮れて道遠い所の私に取りまして、非常に難有いのであります。別に貴君方から感謝して頂かなくてもよい。唯だ讀んで頂いて、御讀み下さつた事に就いて、貴君方の御意見を云つて頂くことが出来たならば、それ程難有い事は無いのであります。別に私に付ける所の薬は無いのであります。それが一つの薬である。其の意味に於きまして、蘇峰會と云ふもの、成立ちました事は、私は甚だ僭越でありまし

て、是はお断りするのが當り前であらうと思ひますけれども、皆様方ですて下さると云ふ事でありますから、不肖を顧みず、喜んで受けた次第であります。要するに此會に依つて、私の疲れた心を更に新にし、私の漸く倦まんとする所に力づけ、更に新しき所の生命を以て、私の命の限り文章報國の實を擧げたいと思ふに外ならないのであります。

二 予の修史事業

それで今夕は、私の御話申上げる事を二つに分けて置きます。此所に書いてあります『維新史の骨髓』と云ふのを第二段に致しまして、第一段には私が唯今書いて居りますところの歴史と云ふものに就て、少しばかり御参考の爲めに申上げて置きたいと思ふのであります。私が歴史を書きたいと考へました事は、決して一朝一夕の事ではありません、

餘程古い事であります。年をとつたらば是非書いて見たいと考へて居たのであります。何時の間にか年をとつてしまつたので、それで愈々歴史に着手しましたのは大正二年の末、大正三年の初であります。其時にもう筆を執り出したのであります。所が大正三年の五月に私の父が死にました。父は常に私に申して居ります。又た父の手紙が猶ほ残つて居ります。「お前の書いた歴史をおれは讀んで死にたい」と斯う云ふ事を申して居りました。私の父は大變健康でありました。又た私は其の當時は政治に就きまして、色々微力を致して居たのであります。それで、父は少なくとも百までは生きて呉れるだらう。其間に書上げやう、さう思つて居たのであります。段々考へて見ると、父の年も九十三になる。父も段々年を取つて來る様になりましたから、是ではいかんと思つて、大正三年には書き始めたのであります。書きかけて居る時に父は死んだのである。で私は、もうそれからがつかりして、當分何も書く様な氣分にならずに、唯だ新聞に書き、小

冊子を書いたまで、遂に大正七年まで過ぎたのである。其間決して遊んで居たのではありませぬ。可なり矢張り勉強して居りましたが、唯だ歴史を書くこと云ふ事だけは、どうしても筆が執れなくなつた。今から考へて見れば、是が寔に遺憾な事でございます。

それで愈々大正七年五月の末に筆を執りまして『修史述懷』を書き、正則に筆を取り出したのは六月からであります。それから大正八年には生きる死ぬの病氣に罹りましたが、矢張り病院で筆を執つて居りました。十二年九月の大地震には逗子に居りましたが、家の中に居られませんでしたから、庭に机を持つて參りました。矢張り庭で書いて居りました。さうして今日に至つた次第であります。

初には何所から書立てるか云ふ事に就いて色々考へまして、維新の所から書いたのであります。少し書いて見ますと、諸方に怖い小父さんがまだ澤山生きて居る。即ち薩長の元老であります。私が全く知らない人であれば、さう云ふ八々が

何と云はうとも私は構はない。然し其等の元老の中には、私が極めて親しく教へを受けたる人もある。又た私が多年色々の關係を有つて居る人もある。さう云ふ人々が若し今度こそ前の鑑賞と違つて、本當の選舉干渉の干渉をやつて來て、斯う云ふ事をお前は書くが、どうも是は困る、斯う云ふ風に書いて貰ひたい。など、云ふ様な事が出て來ては、是は大變である。それが一筋ならばまだよいけれども、右から斯うと云へば、左からは斯うと云ふ様な事があつては、是は到底いけな。先づ維新の歴史は後にして、維新に行き著く前から書かうと云ふ風に、私は考へた。決して先輩の死ぬ事を祈つた譯ではありませぬ。待つて居る譯でもありませぬ。然し書いて居る内には、時が之を解決するだらうと考へたのであります。それで私は何處から書かう。初は南北朝から書かうと考へましたが、それにしては少し長過ぎる。よし、それでは織田信長、即ち『近世日本國民史』の劈頭として、織田信長時代を書かうと云ふ事を考へ出したのであります。それで初は十年計畫

を立てまして、十箇年の内に書上げてしまふつもりに致しました。然るに今日に至りましては、十年計畫はとづくに過ぎまして、既に十二年になつて居ります。そしてどの位のものをごんじ書いて居るかと思し申すれば、あとから悠くり其事は申上げますが、兎に角豫定の計畫通りに行かないと云ふ事だけは、半ばにして判つたのであります。それで私は大正十二年一月一日、私の還暦の時に斯う云ふ詩を作りました。

嶽雪波光帶二瑞烟

笑迎華甲一周天

人間百事消磨盡

唯禱殘生二十年

唯禱殘生二十年

文章敢擬馬遷編

巍巍明治聖天子

盛德宣揚千古傳

盛徳宣揚千古傳

君民相信道相全

文章報國非無留意

唯禱殘生二十年

「唯禱殘生二十年」、せめて八十一歳まで生きて、其内には是非書上げたい。斯う云ふ風に考へた。十年計畫を二十年、若くはそれ以上の計畫に變へたのである。さうして今日迄に書いたものを申上げますれば、卷數は三十八卷を書いて居ります。回數は四千二百四十一を書いて居ります。私の原稿紙に書きましたものは、本日迄にざつと積りまして五萬五千三百三十三頁になつて居ります。其外に色々のものを合せまして約一千頁あります。兎に角五萬六千餘頁書いて居るのであります。さうして唯今は何所を書いて居るかと申しますれば、安政五年、最早戊午の大獄に近づいて居りまして、維新の歴史に於て最も大切なる所まで、稍や筆が進みつゝある所であります。

私の友人——多分此所に御列席の中にもさう云ふ御考の御方が居らつしやるで

あらうと思ひますが、どうも餘り道中が長過ぎる。早く結論を聽きたい。それで、どうぞ逆様に歴史を書いて呉れないか。川上から降りて來るのは困るから、先づ川下から段々上ると云ふ風にやつて貰ひたいと、斯う云ふ事を私に云つて下さる方がある。手紙でも來ます。言葉でも聞きます。澤山あるのであります。然し私は却々さうは行かない。皆様の御註文の様にどうも拵へると云ふ事は出来ない。唯だ歴史と云ふものを拵へる——私は決して歴史製造人ではない。豆腐屋が豆腐を作る様な意味に於て、決して歴史は書いた譯ではない。及ばずながら、書く時には自分が矢張り其の時代の人間となつて、其の時代の潮流からずつと動いて書いて居るのである。少なくとも元龜、天正の間の事を書く時には、自分の氣分も元龜、天正の人間となつて書いて居るのである。恰も毎日私が東京日日新聞の夕刊に批評を書く様な意味に於て、即ちあの文章を書くのは、昭和の今日に於ける所の人間として、あれを書いて居ると云ふ様な意味に於て、矢張り其の時代々々の事を

書いて居る積りであります。それで其の順序をずつと歩いて行かなければいかな
いから、逆に書くなど、云ふ様な事は、まるで私が輕業師であれば兎も角、どう
も私にはさう云ふ器用な手際は出来ないので、矢張り順序に書いて行くと云ふ外
はない。私に出来る事は、唯だ毎日勉強して書くことと云ふ事に、外ならぬのであり
ます。然しながら、昔の人でも、歴史と云ふものを、さう早く書き上げたものは
ありませぬ。

『史記』は二十四年掛つて出来て居る。歐陽修、宋子京の『新唐書』なども、十七年掛
つて居る。司馬溫公の『資治通鑑』も、凡そ十九年掛つて居る。山陽の『日本外史』は
早く出来たと云ひますけれども、出来上る迄には二十四年掛つて居る。山陽の詩
にも、「二十四年我書を成す」と云ふ外史を詠じた詩があります。又たギボンの『羅
馬覆衰史』、是は五年間準備をして、三年間書いて初の二卷を書上げ、其後十一箇年
目に最後の卷を書上げましたから、凡そ十九年から二十年まで掛つて書いて居る

のであります。マコーレー卿の書いた所の『英國史』は、最初の二卷と次の二卷との
間が十箇年ある。それで推して見れば、最初の二卷を書上げる迄の時間が約十箇年
と云ふ事が分る。で、是も矢張り二十箇年掛つて居る。而かもマコーレー卿は、其の
開卷劈頭に、ジエームス二世の即位からして、現代人の記憶に残る間の事を書いて
見たいと云ふ事を特筆大書して居りますが、マコーレー卿が二十箇年間掛つて書
上げたものは、どの位のものであるかと云へば、漸く十七箇年の間、一年掛つて一
年の歴史を書いて居ないのである。御承知の如くマコーレー卿の文章は、天馬空を
行くと云ふ様な偉い文章であります。此人の文章を讀む時には、吾々はまるで走
る様に讀める。それ程に美事に書いてあるのである。昔の人が曾て——それ程昔で
はありませぬが、今はもう昔である——マコーレー卿の文章を評して云つた事が
ある。「彼は一つの句を書く爲めに二十卷の書物を讀んだ。彼は一つの記述を爲す
爲めに百哩の旅行を爲した」と。此位に此人は注意をして書いたのである。さうし

て漸く彼は十七箇年間に二十箇年で書いて、最後の一卷は其の妹さんが、マコーレ
 ーが死んでから二年目に出版して呉れたのである。それで十七年目になつて居る
 のであります。若しマコーレー卿の云つた通りに、所謂現代人の記憶と云ふ所ま
 で行けば、其後約百五十年ある。幾ら短かく積つても百二十五年以下に出でない。
 大隈侯爵の百二十五歳と云ふ様な割合に行つても、到底マコーレー卿は書切れる
 氣遣ひはないのである。人間は兎角自分の力を信仰し過ぎて、開卷劈頭には、自
 分が三百年も生きて居なければ書終る事の出来ない様な約束を書いて居るのであ
 る。私は果してさうであるかないかと云ふ事を、此所で申上げる事は出来ない。
 然しながら少なくとも私は、今から十年位経てば書いて了ふ積りである。何故な
 らば私は書いて了つてから、更にもう一つ書きたいものがあります。
 是は御約束ではない。若し二度と生れ還つて來たならば、或は書けるかも知れな
 い。私は支那の政治史を書いて見たい。是は私が長い間考へて居る所の、支那の

政治上の歴史である。逆も私共の様な無學の者には、支那の一切の事を書く事
 は出来ない。然し支那の政治の歴史だけは書いて見たいと思ふのである。
 御承知の通りアクトン卿と云ふ英國の歴史家は——此人は有名な歴史家である、
 餘り此人は材料を調べ過ぎて、一生の間少しも書かずに死んだ人である。まだ足
 らない、まだ足らないと云ふ事で、一生材料を集めて、材木屋で終つた人である
 が、偉い人でありまして、私共は非常に尊敬して居る。此人が千八百七十七年
 に獨逸の歴史家のランケと云ふ人に出會つた。其時にランケ先生が八十一歳、耳
 も遠くなつて、身體はヨボクとして居る。眼は殆んど失明して居る。多分此次に
 來る知らせは、此人の死亡の通知であらうと思つて居たのであります。所がランケ
 先生は、其の二年の後、八十三歳から『萬國史』を書出しました。さうして書きも
 書いた十七冊書いた。『中世史』まで立派なものを書上げて九十一歳、日本で申せば
 九十二歳で死んだのであります。私は逆もランケ先生など、云ふ様な人に比較す

る値打のある者でもなく、又たマコーレー卿など、云ふ人と比較して申す程の者でもありませんが、マコーレー卿程の大物を背負はないまでも、出来る限りに於て、少くとも『近世日本國民史』だけは完成して、皆様方の御覽に入れて見たいと思ふのであります。

山陽先生の如きは五十三歳で死んだ。若くして死んだではないかと貴君方は御考へになるかも知れぬが、五十三歳でも先生は書くだけのものは殆んど書盡して居るのであると思ふのであります。あれだけ書けば、私も五十三で死んでも、少しも惜しくないであります。唯だ私はあれ程のものを後に残す事が出来ないから、斯う云ふ事を申上げる譯であります。

三 予の修史事業の特色

それから餘計な事でもありますけれども、一言まだ申上げて見たい事がある。畢

竟さう云ふ時間が掛かると云ふものは、お前さんが役にも立たない様な古めかしい材料を、右から左から、前から後から引つ張り出して来て、陳列するからである。さう云ふ色々ものは捨て、了つて、綺麗さつぱりと、新しい家を新しい材木で建てたならば、文化式の建築が出来て寔に結構であらう。斯う云ふお話もある。御尤である。私も文化式の建築もして見たいと思はぬ事もない。然しそれには私の深き考がある。昔の人も言つて居る。「司馬遷は三千年の事を叙するに唯五十餘萬言。班固は二百年の事を叙するに乃ち八十餘萬言、此を以て兩人の高下を分つ。」則ち司馬遷は三千年の事を書くのに五十餘萬言、然るに班固は二百年の事を書くのに八十餘萬言。班固と云ふ男は實にくどい。是で司馬遷と班固の高下と云ふものは分ると云ふ。是も一理はあるのである。然し班固と云ふ人は、二百年の事をさう長たらしく書いたと云ふものはどう云ふ譯かと云へば、其中に經世實用の文字を入れて居る。それが實に『漢書』の偉い所であつて、『漢書』の實と云ふ

ものは、班固の議論よりも、班固の説明よりも、當時の人の意見議論、上書、建白と云ふものをちやんと入れてあつて、當代のものが後の者にもちやんと分る様にやつて呉れて居る。其處に班固の本性が現はれて居るのである。私も一十とした貸家を建てる様な、所謂文化村式の現代式建築ならば、もう少し手軽くやりませうけれども、不肖ながら私の書きまするものは、唯だ現代の御方々の御覽に入ると云ふばかりではない。出來得べくんば後の人の爲めにもしたい。後世子孫の爲めにかたみとして遺したいと云ふ考があるのである。其爲めに皆様には餘計な事と御考へになるかも知れませんが、色々なる證據物件やら、文書やらを持つて來て入れて居る。先日西園寺老公に御目に掛つた時に、老公の言はるゝには、「あなたが細工をせず、加工せず、ありの儘に昔の文書を入れて下さるのは、寔に嬉しい。あれでこそ初めて歴史と云ふものに信用が出來て、吾々はいれを寔に樂しみにして讀んで居る」と、斯う云ふ事を言はれたのである。私は決して西園寺老公を此

所に證據人に引つ張つて來て、私の辯護人に使ふ譯ではない。然し私は、流石に譯の分つた人だと云ふ事を其時に思つたのであります。又た同じ事を兩方から書くなど、云ふ様な事は、餘計な事といふ人がある。然しなから例へば、ペルリの日本に參りました事も、日本側から書いて見たのと、ペルリの側から書いて見たのと、兩方を合せて見ると、兩方の事がよく分るのである。兩方の話を聞かなければ分らない事は、矢張り兩方に云はせて聞くより外仕方がない。もうおれの話で澤山だ、お前の方は黙つて居てよいでないかと云ふ事では、本當の話は分らぬ。それでは歴史もやり切れないのである。それで亞米利加の材料に依つて段々考へて見ますと、ペルリ提督が日本の恩人だなど、云ふ様な考はどうしても抱く譯には行かない。ペルリは亞米利加の恩人である。亞米利加の爲めに日本に來た人であつて、亞米利加の爲めには實によく働いて居るから、亞米利加人としてはペルリ提督をもう少し尊敬してもよい。もう少し感謝してもよい。

然し決してペルリ提督は日本人の恩人ではない。成程理窟を云へば、クルク廻つて恩人と云はれぬ事はない。然しながらペルリ提督が、兵力を以て日本の開國をしたと云ふ事が日本の恩人であると云へば、其處まで出て来たのは、亞米利加の鯨を捕る船が日本の沿海を廻つて居た。それが元である。鯨を捕る船が日本の沿海に來たのは何の爲めに來たかと云へば、日本の沿海に鯨が浮んで居るからである。それで若し日本人がペルリ提督の爲めに記念碑を建てなくちやならぬと云ふ事であれば、先づ第一に金華山の沖を泳ぐ所の鯨の爲めに、記念碑を建てなければならぬ筈である。

例へば又たタオンセント、ハリスと、日本側との談判など、云ふものを、兩方から觀ればよく分る。日本人が重いと思ふ所のものは、向うで軽く受け、向うの重いと思ふ所は日本人が軽く受けて、兩方の考へが別で色々の經緯がある。兩方の經緯を見れば實によく分る。其時の談判筆記などにも「其方儀」と書いてある。

是は決してハリスに向つて「其方儀」など、云ふ言葉を言つたのではない。英語で云へば you と云ふ字でありませうが、其時は和蘭語で話したかと思ふ。決して日本流の「其方儀」ではない。然しながら日本側の記録には、「其方儀」と書いてある。たつた「其方儀」と云ふ三字である。然し其の三字の内に當時の幕府の役人の量見や、又た其の時分の日本人の外國人に對する所の色々の模様や、總ての意味が含まつて居る。之を作り換へて「汝」とか「御身」とか何とかしてしまふと、もう其時の事は分らなくなつてしまふ。昔の文書を其儘出すと云ふ事は、其の言葉つき、其の口吻がちやんと昔の有様を生寫にして來るから必要であります。それ等の點に就ては、私は色々注意して居る積りである。尙ほ是等の事に就ては精しく申上げて見たいけれども、是もまだ序論であつて、本問題はあとにあります。餘り長くなつては困るから、此所は飛ばしますが、兎に角當時に於て川路左衛門尉、若くは筒井肥前守と云ふ様な人が、露西亞のブーチ

ヤチンと談判した時も、水野筑後守が英吉利人と談判した時も、亦た岩瀬肥後守、井上信濃守が亞米利加のハリスと談判した時も、彼等は何等此方の事を知らない。此方は向うの事を知らない。半分は向うの云ふ事を聴いて、向うから教へられた材料を以て、向うと議論をして、なるべく此方の不利にならない様に進めて行つた。却々此方から材料を持つて行つて、向うと喧嘩するのではない。兵糧も弾薬も鐵砲も向うから借受けて、それを向うへポン／＼打つて居るのであつて、二倍も三倍も骨が折れたのである。さう云ふ時に於て兎も角も國家の大いなる耻辱とならないだけに話を纏めた其の苦心を考へて見ますれば、今日の大使其他の外交官、若くは今日霞ヶ關邊りで御やりになる所の外交など、云ふものに比べて、決して、今の人は伶俐な人であり、偉くあり、昔の人は馬鹿であり、腰拔である云ふ様な結論は出來ないのである。昔の人は昔の人相應に隨分骨も折り、國の爲めに力を盡して居るのであります。

さう云ふ様な事を、唯だ一掃的に、世の中と云ふものは、物が唯だ轉じて來た様に思ふのは間違ひである。貴君方が雪達磨を作るさへも、自然に雪達磨は出來るものではない。人間力がなくては出來ない。況や國家の進運が今日に至つたと云ふことは、是は自然の大勢で、寢て居ても此所に來ると思ふのは飛んだ量見違ひである。是は悉く吾々の先輩の努力の結果である。吾々は先輩に向つて感謝すると同時に、吾々の子孫に向つても、先輩に感謝すると同様の力を以て働きかけを行かなければならぬ。斯くの如くあつて、始めて歴史は意義ある所のものであると思ふのであります。

四 予の修史事業の普及

最早私の歴史に就て申上げる事は是で終ります。尚ほ云ふ事がある。「司馬溫公撰ニ資治通鑑一成。唯王勝之借讀一度。它人讀未盡二十紙。已欠伸思睡矣。」司馬

温公が「資治通鑑」を作つた時に、誰れも之を讀む者が無い。王勝之と云ふ男が、是も一寸貸して呉れと云つて一度讀んだ。外の人は讀んでも十枚讀まない内に欠伸をして、そして睡くなつたと云ふ事が書いてある。私の「國民史」の如きも、若し此例を以てすれば、「近世日本國民史」と云ふよりも、恐らくは欠伸製造史かも知れない。私も此點に於ては決して自惚れて居ない。欠伸でもして呉れる人があれば仕合せだが、先づ失敬して讀まない人が多くはないかと思ふ。

然し偶には讀む人がある。茲に讀む人の例を一つ申上げませう。關東大地震前の事でありませう。皆様も御記憶になつて居りませう。大杉榮と云ふ人がある。其の妻君に伊藤野枝と云ふ人がある。此の夫婦は當時逗子に住んで居りました。私も逗子に居りまして、よく汽車で乗合せた。誰も大杉夫婦に話しかける人は無い。彼等も亦た車中で何か警戒して居る様な風である。其横には刑事らしい人がちやんと附いて居る。私も考へた。同じ日本人だ、話だけは差支へあるまい。都合が好ければ彼も我が主義になるかも知れない。話をしてやらうと、それで私の方から立つて行つて「御見掛すれば貴君は大杉さんらしくある。私は徳富と云ふ者である。少し話さうではないか」と云つた。所が大變喜んだ。奥さんの野枝さんも傍から「徳富先生は私もよく知つて居ります。先生の御宅の側には饅頭屋があつて、其家へ私は饅頭を買ひに行くから、よく貴君の所も知つて居ります。」と云ふ譯で、段々話をして居る内に野枝女史が申しまするには、「先生には私は非常に感謝して居る。何を感謝して居るか。貴君の御書きになつた御本が非常に私共に利益を與へる。それは私も大變結構な話だと思ふが、然しどう云ふ譯ですか。皆な私共の仲間が牢に參ります時は、牢の中で寂しくて堪へられない。大概の本は直さに讀んで了ふが、先生のは讀みでがある。見て居つても盡きない。それでも何時も先生の本を差入れてやります。」斯う云ふ事を私に申しました。そこで私は「どうぞ出来る事ならば貴君方も、娑婆でも讀んで頂きたい」と云つた譯であつ

た。

た。然るに最近或る有力なる政黨の或る有力なる政治家が或る事でも或る所へ入つた。そして其處から私に手紙を呉れた。「今君の本を讀んで大いに興味を感じて居る」さう云ふ手紙を呉れた。私はそれを貰つて涙の出る程嬉しかった。それからもう一つは、或る有力なる貴族院議員が——是は直接私には話さないけれども、新聞で、同じ所で私の歴史を讀んだと云ふ事である。それで少なくとも、或る場合或る場所では讀まれて居る様である。どうか出來得るならば、もう少し何所でも讀んで頂き度いのであります。

私が毎日、新聞に書いて居る所のものは、寔に面白味のない、丁度大きな家を造つて行くに、一つの石を持つて來て載せ、一つの煉瓦を持つて來て載せる様なものである。石や煉瓦と云ふ様なものには、何等の興味が無い。然しながら段々それが重なつて行けば、其處に一つの塔が出来る。其處に一つの大きなホールが出来る。それが段々に完成すれば、一つの大きいなる所の建築若くは殿堂が出來ない

とも限らないのである。皆様方は、長崎の大浦に御出での方は御承知でありませうが、彼處に天主堂がある。もう造り出してから三十年とか申しますが、まだ造りかけである。隙がある毎に煉瓦を持つて來て積む。定つた大工があるでもない。定つた左官があるでもない。皆な信者が夫々やつて行くのであつて、出來上る時が即ち出來上る時と云ふ様な事になつて居る。私の歴史もそれ程呑氣ではな

いけれども、兎に角大いなるものを造るには、餘り急げば途中で息が切れます。それで長い道を歩くと云ふ秘訣は、矢張りそろそろと歩くと云ふ事であると考へまして、私はそろそろと歩いて居る。然し未だ曾て一步も休まない。必ず歩き續けて居りますから、其點はどうか御安心を願ひ度い。是で第一段は終つた譯であります。是から本段に移らうと思ひます。

今までのほんの何も無いものでありまして、皆様方の御聴きに達したと云つても、皆様方に御利益を興へる譯ぢやない。唯だ私の申譯に過ぎなかつた。是れか

らは何んぞ貴君方に御參考になるやうなものを申し上げたいと思ひます。即ち「維新史の骨髓」と云ふ事でありませぬ。

五 維新史とは何ぞや

維新史に就きましても色々の觀察がありまして、勤王論もあり、幕府破産論もあり、世界大勢論もあり、薩長論もあり、或は公武論、實力と格式門閥論、武備機關と生産機關との更迭論、資本主義の擡頭、神武の復古思想から、十九世紀の蒸汽、電氣の時代迄、種々様々の觀察が入つて居るのである。私は維新の事に就て、皆様方の觀察を何れが良いか、何れが悪いかと申上げませぬ。申して見れば何れも御尤と申すより外はない。譬へば富士の山を描きまするにも、狩野風もあり、雪舟風もあり、土佐風もあり、南畫風もあり、洋畫風もあり、浮世繪風もあり、又た其の浮世繪風にも北齋流もあれば廣重流もある。例へば北齋の富士百景

と云ふものを見ますると、桶屋の桶の枠の中から見る富士がある。又た或は子供が凧を揚げて居る、其の凧の下から見た富士もある。桶の中から見ると富士は富士でない、凧の下から見ると富士でないとは云はれませぬ。何處から見ても富士は必ず富士である。唯だ然し乍ら富士を見るのに桶の底を剝して見るがよいか、子供の凧の揚つて居る下から眺めるがよいか、其の見方に就ては、銘々流儀がありませうが、私は矢張り富士は富士として、ちやんとした所から見ることがよと思ふ。維新史に就ても、私は大觀的に、綜合的に此處が維新史の骨髓と云ふ所を、捉へる事が必要ではないかと思ひます。

話かくどくなりませぬから、今度は結論から申すのである。私の維新史に就ての骨髓と云ふ所を、一言にして申しますれば、
維新史は大和民族の精神的活動の最高潮に達したる時期にして、其の目的は天皇を中心としての國家的水平運動、日本帝國を中心としての國際的水平運動で

ある。

と信ずる。是が私の考へである。即ち國家的には、日本全國が天皇を中心として一致協力して、水平的にちやんと平等になつてやる。天皇を中心としての國內の水平運動、又た次には日本帝國を中心として世界に向つての水平運動、是が即ち維新史の骨髓である。今日唯今倫敦に於て軍縮會議や何かをやつて居るのも、國際的水平運動をやつて居るのである。私も昨日書いた通り、(參照 『軍縮會議と國際的公義心』昭利五年二月十一日付東京日々新聞、大阪毎日新聞夕刊掲載) あれば本當の事でありませう。五五五、三三三でなくちやならない。七割六割と云ふ話は實は吝な話である。まだ本當の水平に達して居らない。然し乍ら六割よりも七割がよいと云ふ事は、一割だけ水平に近いからである。で、維新はまだ終つて居ない。今も猶ほ維新の流に吾々は棹さして居るのである。

昔の人の申したことに「經を以て經を釋く」と云ふ事がある。歴史を解釋するに

も、矢張り歴史を以て解釋しなければならぬ。維新の事を解釋しまするにも、理窟ではいかない。維新の歴史を解釋するには、日本の歴史と云ふもので解釋しなければいかない。所謂經書を解釋するには、經書を以てしなければならぬ。孔子の一つの言葉を解釋するには、孔子の他の一つの言葉を以て解釋すると云ふ様な譯で、日本の或る期間の歴史を解釋するには、日本の他の期間の歴史を以て解釋する外に道は無い。

茲に一つの申上げねばならぬ事がある。例へば日本の事に精通したと稱せられる所のチエンポレン博士の如き、此人は御承知の通り、日本學者として名高い人である。此のチエンポレン博士が新宗教の製造と云ふ事を書いて、維新の政府が出来てから、事珍しく「忠君愛國」と云ふ自分等の政府を維持するに、極めて都合の好い宗教を作り立てたと云ふ事を書いた。是は根本的の間違ひである。維新の政府が忠君愛國を作つたのではない。忠君愛國が維新の政府を作つたのである。

る。別に大なる違ひは無い。唯だ前提と結論とを引つくり返せばよい譯である。

六 維新史の前提としての日本史の概念

日本の歴史と申しましても、亦た維新史を説く爲めと申しましても、申上げれば數限りもない。それで唯だ其處此處から一こと、二こと申上げる。貴君方の多分最も御嫌ひであらうと思ふ源頼朝も——朝權を偷んだ張本人の様に云はれて居る所の源頼朝——誰も頼朝に最負する人は無いでせうから、私が頼朝の悪口をすれば、皆様も御満足になると思ふ。其の頼朝さへも申して居ります。南都東大寺觀進の俊乗上人——是は御承知の通り東大寺を再建した人である。辨慶の讀んだ勸進帳も此人の作つたものである。——此人に取つて頼朝は大檀那である。其の俊乗上人が頼朝に手紙をやる時に、頼朝の事を君と云つた。そこで頼朝が云ふには、「君と云ふ字は、朝廷に對して恐れがある。どうぞ私に手紙を遣る時に

は君と云ふ字を書いて呉れるな」斯う云ふ事を申して俊乗上人を戒めた事がある。又た頼朝は二度も京都に出かけて、朝廷に色々の事を申上げて居る位である。彼は一面に於て朝權を偷んだと云はるゝに拘はらず、朝廷に對しては充分の敬意を表して居るのである。其の息子の實朝に至つては「山はさけ、海はあせなむ世なりとも、君に二心われあらめやも」斯う云ふ歌を作つて居る。私は此歌一首あれば、實朝の名は千秋に傳ふるに足ると思ふのである。是が頼朝の伴の歌である。それで、鎌倉の武門として朝廷の權力を偷んだと云はるゝ所の頼朝父子と雖も、勤王の精神を持つて居た事は是で分るのである。承久の亂。承久の亂と云ふものは日本の歴史に於て、最も注意をしなければならぬ所のものである。此亂に就ても、泰時が京都に向ふ時に、父の義時に向つて、「若し後鳥羽上皇が御自身に御出ましになつた時はどうするか」と聞いた所が、義時は、「其時は馬より下り、兜を脱いで君の前にひれ伏せ」斯う云ふ事を申した。

彼等も君に對しては、直接に色々の事を致すと云ふだけの事は、初から考へて居なかつた。然るに三上皇が御遷幸遊ばさるゝ様になつて、隱岐、阿波、佐渡と、各地に御流し申す事をやつたのは、是は北條氏の一大失策であつた。之をしなれば北條氏は餘程偉かつた。戦さは致方がない。向うから御攻めになつたのだから、止むなく戦つたのである。戦さの濟んだ後にちやんと善後策をして、宜しきを得ればよい。然るに天子様の御遷幸をやつたと云ふ事は、是は北條氏に取つて非常な失敗であつて、文永、弘安の蒙古退治をした事を以て差引いても、猶ほ北條氏の罪は免れない。然しながら彼等北條氏と雖も、全く君をなみしてしまつて、自分が天位を窺視すると云ふ様な事は無かつた。矢張り北條氏は從五位武藏守、相模守で安心して居たのである。其上は望まなかつた。

唯だ御同様茲に考へねばならぬ事は、即ち文永弘安の役である。日本は對外問題の生ずる毎に、皇室を尊崇すると云ふ事に必ず結論が來るのである。外に向つて行く

時には、内に向つて一致しなければならぬ。内に向つて一致すると云ふ時に於て、は、誰を中心とするかと云ふ事にならなければならぬ。誰を中心とすると云ふ事になれば、皇室以外に中心とするものが無いからして、外との問題が起る毎に、必ず皇室中心主義と云ふものは光を放つて來るのであります。即ち文永弘安の役が其通りである。皆様も御承知である京都の加茂の正傳寺と云ふ所に、宏覺禪師と云ふ人の蒙古退治の願文がある。是は鎌倉時代の文章として、實に結構な文章である。願文は長いから今は讀みませぬが、實に結構なものである。中に「滴水寸土朝恩に非るは無し、道を行ひ善を修む皆國家に歸す」斯うあります。而して宏覺禪師の詠んだ歌に、

末の世の末の末まで我國は萬の國にすぐれたる國

何を以て萬の國に勝れて居るか。申上げる迄もなく、萬世一系の皇統を戴くから、萬の國に勝れて居る。是は申す迄もない事である。で此の思想は即ち今日の言葉

で申しますれば、忠君愛國の思想である。此の忠君愛國の思想は、北條氏の時代に承久の役があり、一時は殆んど之を押付けて居たのが、蒙古の役があつて再びそれが光を放つて居る。若し恩人と云ふ言葉を云へば、ペルリよりも或は元の忽必烈の方が恩人かも知れない。其の元の忽必烈がやつて来たが爲めに、日本に暗まり掛けて居つた所の忠君愛國の思想が大いに盛んになつて来た。斯う云ふ譯であります。それで「滴水寸土朝恩に非るは無し」と云ふ事は、維新の前安政年間に、是も勤王家の詩人である、梁川星巖の作つた詩に斯う云ふのがあつた。

朝市山林不可岐

能忘喧寂是男兒

人間舉足盡王土

縱使巢由無處之

實に良い句である。巢由と云ふのは支那の人であつて、非常に無頓著な人で、王様も何もない。所謂自分は自分で行くと云ふ人である。所が日本では、何所の山に隠れても、皆な天皇陛下の御支配の所であるから、縦へ自分が巢由となつて天



皇の御支配の外に立たうとしても、往く所が無い。「人間足を擧ぐれば盡く王土」即ち今の宏覺禪師の申した通り「滴水寸土朝恩に非るは無し」で、どうも吾々は致し方がないのである。此の思想は、普天の下率土の濱、悉く是れ王土であり、王濱であると言ふ考へは、對外の思想が出来るときに必ず勃興するものであつて、蒙古の時が其通り。維新前の外難の時が其通り。如何なる場合でも其通りであります。それから南朝の歴史。南朝の歴史に就ては今詳しく申上る必要はない。皆様が御承知である。北畠親房の「神皇正統記」を作つた如きは勿論の事、足利時代の下剋上の時にも、猶ほ勤王の光は輝いて居たのである。さう云ふ關係を持つて来たのであつて、維新の歴史を解釋するにも、維新の歴史と云ふものが急に飛出して来たのではない。維新の歴史まで来るには、ちやんと道行がある。承久の役があり、文永弘安の役があり、元弘建武の役があつて、而して嘉永安政、慶應、明治、斯う云ふ風にちやんと道が動いて来て居るのである。

斯う云ふ譯であつて、忠君愛國と云ふものは、日本國民、大和民族の固有の思想である。其の固有の思想が到る時の歴史に培はれ、養はれて來たものであり、而してそれが或る機會に於て、大いに顯はれて來るのであつて、即ち其の忠君愛國の思想と云ふものが出來て、維新の歴史が出來上つたのであり、維新の政府が出來上つたのであります。是が第一段であります。

七 皇室と歴史

是から第二段に就て申上げて見たい。日本の歴史に就て、吾々は其の特色を考へなくてはならぬ。私は『日本國民史』と書いて、『日本天皇史』とは書かなかつた。私は主として日本國民の運動を書かうとして居るのである。然るに日本の國民史を書くとき、日本に於て、日本の天皇を除外して、書ける所のものは一頁も無い。それは何であるかと云へば、日本の歴史に於て、日本の主なる出來事は、必ず

天皇様か皇族の御方が其の中心になつて、日本の歴史と云ふものは動いて來て居るのである。之を看過す事はどうしても出來ないのである。本日は紀元節である。此の紀元節に當つて、私共が神武天皇の盛徳大業を頌する事を得ると云ふ事は、寔に仕合せであります。

先づ日本の歴史から、恐入つた事ではありますけれども、神武天皇と云ふ御方を取除けて見れば、日本の歴史は成立たないのである。それから日本統一の業に就て、最も御力を盡された所の崇神天皇、四道將軍を派遣して、統一の業をなされた所の景行天皇、及び日本武尊——景行天皇は御承知の如く、九州の果迄も御出でになつた。今でも九州の果に參りますと、此處は景行天皇が御船を御繋ぎになつた所であるとか、此處では景行天皇に魚を差上げたとか、此處では景行天皇が御休息になつたと云ふ様な所がある。到る所に口碑が傳はつて居る。又た東北の方には、日本武尊が此處に御出でになつて斯う御やりになつた、彼處に御出

でになつて斯う御やりになつたと云ふ事がある。静岡縣にもあれば、千葉縣にもあります。群馬縣にもあります。景行天皇の御遺跡は何處にもある。山梨縣にもある。三重縣にもある。到る所にある。それから推古朝の文化と云ふ様なものに至つては、聖徳太子を除いて之を語る事が出来ませぬ。又た明治維新と常に對照比較される所の大化の革新と云ふものに、天智天皇を除いて申すことは出来ませぬ。又た天平の文化と云ふものから、聖武天皇を除く事は出来ませぬ。殊に元寇の時に於ては、龜山天皇、或は後宇多天皇が、身を以て國難に代らんとなさつた。是れ皆な天皇が中心、然らざれば皇族の方が中心となつて、日本の大運動をやつて御いでになる。南北朝の如きも、後醍醐天皇が中心である。私は、人が楠正成、新田義貞、北畠親房、名和長年、斯う云ふ人の忠義の徳を説く事に不平は無い。是は當り前の事である。然しながら是等の忠臣を御使ひになつた所の後醍醐天皇と云ふ御方は、實に御偉い御方である。恐入つた事であるけれども、

後醍醐天皇の御缺點は、餘り御偉ら過ぎたと云ふ點にあるのである。あの時代に於て、後醍醐天皇に向つて立つ人は無かつたのである。實に御偉い御方である。何から云つても御偉い御方である。

徳川幕府になりまして、後水尾天皇、後光明天皇、靈元天皇、桃園天皇、光格天皇、何れもそれ／＼御特色を御持ちになつて、勤王の機運を鼓吹して御いでになつた。何れも幕府のやり方には御不満があらせられて、何時かは朝權を恢復しようとして云ふ御考があらせられたのである。而して夫等の歴代の御考が、孝明天皇に至つて初めて大きくなつて現はれて來たのである。それ迄は地下水の様にして流れて來たのが、孝明天皇になつてはつきり分つて來て、水が湧いて來たのである。非常に湧いて來た。それで維新の歴史からして、孝明天皇と云ふ偉い御方を取除けて御話をするに云ふ事は、絶対に不可能である。

或人は、維新の歴史は徳川氏の所謂る身代限の歴史である。薩長の連中が關ヶ原

の警を、二百何十年の後に討つたものである。大阪の町人が江戸の武士に取つて代つた歴史であるなど、色々面白く御話になる。然し非常に御尤ではない。然し幾分かさう云ふ事もあつて、關ヶ原の事から長州人や鹿兒島人は動いたであらう。大阪の町人が金持になつて、江戸の旗本が貧乏したと云ふ事も事實である。幕府が愈々分散しかけた事や何かも事實である。現に小栗上野介と云ふ様な人は、本氣で云つたのではあるまいが、横須賀造船所を造る時に、どうせ賣家をするならば、土藏付賣家と云ふ貼札をするがよからうと云ふ事で、横須賀造船所を造つたと云ふ話が残つて居る。勝海舟先生は、小栗とは立場が違つて居つたでありませうが、幕府は大體自滅する外はないと云ふ見當は先生には付いて居た。夫等を思へば、皆な相當の理窟はあります。然し夫等は唯だ一小部分に過ぎない。全體から申しますれば、天皇を中心とする國民の水平運動であつて、即ち一君萬民、御同様が今日主張する所の運動の源が、御維新に出來たのである。今日に至る迄には、千山萬水を経由して來ましたけれども、今日の時勢と云ふものに來るべく、維新の運動は始まつたのでございます。

八予の歴史觀

近頃は科學的歴史解釋法など、云つて、是は私共の様な無學者には甚だどうも縁の遠い話であるが、こう云ふ事を云ふ人がある。丁度鑛物學者が鑛物を調べ、植物學者が植物を調べる様に、まるで歴史と云ふものは、唯だ一つの法則であつて、其の法則がちやんと動いて行くものである。人間は唯だ法則に制せられて、法則の動く儘に動いて行くと云ふ様に觀察する人がある。然し斯う云ふ御連中は、理窟は御尤である。説明は面白い。然しながら活ける人間と、活ける社會を斯う云ふ人達は殆んど忘れて仕舞つて居る。私は歴史を解釋するには、第一に人間であると思ふ。歴史と云ふものは、馬の歴史でもなければ犬の歴史でもな

い。人間の歴史である。で、第一が人間と云ふものを知らなければならぬ。第二には國民若くは民族を知らなければならぬ。此の二つを知らなければ、歴史は分らないと思ふ。然るに科學的歴史など、云ふ人は、人間とか社會とか云ふものを殆んど閑却してしまつて、他の方面から始終物を眺めて行く。「一體人間と云ふものはどう云ふものか」、斯う云ふ事を皆様に申上げることが甚だ失禮の事であるが、然し是は別に皆様に御返事を頂くと云ふ譯ではない。御考へになつて頂けばよい。他人の事ではない。自分で自分を考へて見ればよい。人間は一面に於ては、食物がなければ生きて行かれない。何よりも食へると云ふ事が必要であります。事實食へると云ふ事は、即ち生きると云ふ事である。併し食へると云ふ事はかりでも、亦た人間は満足しない。人はパン無くれば生きる能はずであるが、又た人はパンのみにて生きるべきものではない。茲に人間と云ふもの、本色がある。世の中には靈専門の人もあり、又た肉専門の人もある。或は又た靈と肉とちやん

ぼんの人もある。大概の者は靈と肉とちやんぼんである。或る時或る場合には肉が靈に勝ち、或る時或る場合には靈が肉に勝つ。何つちにした所で、幾分づゝか互に持つて居る。それでパンの極、肉の極は、極度まで行けば惡魔になる。獄道になる。惡黨になる。遂に惡魔になる。靈の極は、極度まで行けば天の使、神様になる。然し私共は正直の所が天の使にもなれない。惡魔にもなれない。天の使と惡魔の間を往つたり來たりするのが、凡夫ではないかと思ふのである。斯く申す私なども其の一人である、深く自ら信じて居るのである。それで人間は、靈が大變に勝つた時には偉い立派な事をする。然し之は偽善ではない。善い事さへすれば、彼奴偽善者だなど、云ふ人がありますが、それはどうも見當違ひである。中々善い事を作へてする事は出來ない。善い事は仕難いものである。する時には本當にしないで、作らへてする事は却々出來ない。又た悪い事も其通りで、悪い事も作つてする事は出來ない。悪い心は無いらねども、惡人の眞似を

すると云ふ様な事はとても出来ない。悪い事をする時には、本當に悪くなつて居る。善い事をする時には、本當に善くなつて居る。世の中には偽善も少ない、偽悪も少ない。純悪も少なく、純善も少ない。時としては善、時としては悪、時としては惡魔、時としては天使、斯う云ふ風に人間は自ら動いて行くものである。此に歴史の本がある。歴史は是から割出して見なければならぬのである。其時其時の心意氣と云ふものがある。

此世の人間は、上下古今、四海萬邦、皆其通りの人間であるが、又た國民と云ふものが、一つの個性を持つて居る。國民性と云ふものがある。國民性に於て此の個性がある。日本人、支那の人、英吉利人、亞米利加人、佛蘭西人、伊太利人、是等の人を裸にして一と晩立たして置けば、此の人々が皆な立つて居るかと思ふに、さうではない。或る者は運動をする。或る者は居睡りをする。或る者は他所へ泥棒に行く。或る者は唄を歌ふ。或る者は踊ると云ふ風に、銘々流儀がある。

皆様方は境遇に支配せられると仰しやるが、成程境遇には支配せられる。然しながら人々に依つて支配せられ方が違ふ。同じ酒を飲んでも、笑上戸もあり、泣上戸もあり、怒上戸もあり、或は居睡上戸もある。同じ食に飢ゑても、お腹がすいても、或は他所へ行つて、一杯食はして呉れと云ふ人がある。或は他所の畑へ行つて、芋でも掘つて食べると云ふ様な人がある。或は川に行つて、魚でも取つて食ふと云ふ人がある。或は又た瘦我慢で、腹は減つてもひもじくないと云ふものもある。境遇さへ同じければ、皆な同じに支配せらるゝかといふに、さうではない。銘々流儀があり、其の流儀が違つて居る。それで日本には日本の國民性があり、英國には英國の國民性がある。英吉利の國民性を以て、日本の國民性を測る事は出来ない。日本の維新の歴史を以て、佛蘭西の革命を解釋する事は出来ない。日本の王政復古を以て、亞米利加の獨立戦争を解釋しようとしても出来ない。銘々違つて居る所の國民性がある。

それで歴史を調べるには、第一に人間は何者であるかと云ふ事を調べて見なければならぬ。而して第二に國民性がどう云ふものであるかと云ふ事を調べ、第三に其の歴史がどう云ふ経緯を以つて來て居るかと言ふ事を調べて見れば、茲に於て自ら解釋と云ふものは出來て行くものである。

九 維新回天の偉業と孝明天皇

日本の維新回天の事業に就きましては、天皇を中心として働いたと云ふ事は、單に道理の上からのみではない。孝明天皇の御人格がさうである。孝明天皇は御承知の通り十六歳にして位に御即きになつて、まだ御若かつたのである。さうして位に在した事が二十年十ヶ月、此の二十年十ヶ月の間に、天皇がどの位御心配になつたか。それはとても我々が御想像申上げる事も出來ない。然しながら此の天皇が如何に御偉くあらせられたかと云ふ事に至つては、私の考では元弘建

武の時に於ける後醍醐天皇以上であつたと思ふ。少くとも以下ではなかつたと、私は信じて居るのである。

世の中では、維新の事を説くに、維新三傑とか、三條、岩倉とか、或は吉田松陰、或は橋本左内、或は武市瑞山とか、其他偉い人を稱して居る。是は勿論稱すべきであります。然しながら夫等の人々の上に聳えて御いになるのは誰であるかと云へば、孝明天皇である。孝明天皇は決して唯だ天子様として上に持ち上げられて御いになるのではない。天子様が中心となつて、天子様が親ら率先して、全國の人心を鼓舞作興遊ばされた。私は維新の歴史を研究して、天子様の御書さになつた御宸翰を随分澤山拜讀しました。其の御宸翰を拜讀しますれば、總て天子様の方が本になつて、關白とか、大臣とか云ふ者を御指揮なさつて居る。お前等は此の時節であるから、江戸から賄賂が來ても取つてはいけなさと云ふ事迄御書き遊ばした御手紙があります。家來の申す通りに御なりになるなど、云ふ事は

以ての外であつて、御自分から問題を御出しになつて、此事はどう思ふか、此事はどうするかと云ふ風にやつて御いでになるのである。陛下の御製があります。

位 山神の心やいかならむおろかなる身はをるもくるしく

實に恐入つた御製であります。自分は天皇の位にをるのであるが、自分の様な不肖の者が此の國難に當つて十分な事を出かさないと云ふ事は、如何にも御先祖に對して苦しい事である。申譯は無い次第であるといふ御歌である。天子様の神と仰しやるのは伊勢の太神宮であります。又た斯う云ふ御製があります。

すましえぬ水に我身は沈むともにごしはせじな四方の民くさ
自分は濁流の中に溺れても、人民だけは濁流の外に救ひ上げなければならぬ。斯う云ふ御心である。

ぬば玉のよすがら冬の寒きにもつれて思ふは國たみのこと
それから島津齊彬―薩摩の藩主―に御遣し遊ばされた御製に、

武士も心あはせて秋津洲國は動かずともに治めん

とあります。所謂の公武一致、舉國一致、公武合致で此の日本を治めて行かうと云ふ思召である。斯う云ふ天皇様であつたのである。吉田松陰の詩にも「從來英皇不世出」―斯う云ふ御方は滅多に御出でなさらぬ。斯う云ふ稀らしい御方が久振に御出で遊ばされたから、此の御方を奉じて皆な奮發しなければならぬと云ふ松陰先生の詩がある。此の天皇様から見れば、將軍など、云ふものは御家來である。御家來と云ふ意味から云つて見れば、百石取の者も、足輕も、町人も、總て天皇様の御家來である。將軍から匹夫匹婦に至るまで、皆な御家來である。御家來と云ふ意味に於ては、皆な平等である。其の平等の人間が、天子様の下で働くとき、どうして働くかと申しますと、權者は權者として其位に在つて天子様に御奉公する、力ある者は其力に相應し、其器に相應し、其分に應じて王者の爲めに働くとき、云ふ事になりまして、茲に於て門閥と云ふ事がすつかり無く

なつてしまつたのである。版籍奉還も、廢藩置縣も、普通選舉も、皆な一君萬民、即ち天皇を中心として居る水平運動の結果であります。是が即ち維新史の上に於ける所の一つの根本である。外に向つては天皇を中心として日本國民が皆な一致團結して、日本帝國の水平運動をする。即ち對外政策を定めると云ふ事が、維新の因つて起つた所の一つのものである。

十 維新史の中心思想

私が思ひますのに、維新は、孝明天皇の御宇が即ち維新の序幕、明治天皇の御宇が即ち維新の中幕、今日が即ち維新の第三幕に這入つて居る。然るに世の中の人々は、維新と云ふものは既にとつくの昔に無くなつたもの、様に考へて、今日の天下と云ふものが、何處から物が來たのであるかも知らず、自分ながら何う云ふ物が、自分を此處へ伴れて來たかも知らずに、空々寂々で、西洋のつまらない思想な

どに動かされて、まるで人眞似ばかりして暮すと云ふ事は、誠に遺憾千萬である。是程の特色ある日本の維新史を、唯物史觀など、取るに足らない様な説を云ふのは、まるでこの特色を搔消す様なものである。さう云ふ事は自分ばかりではない、子孫に對して、否なそれのみならず、我々を此に持來した所の、先祖に對しても、寔に相濟まぬ次第であると思ひます。

更に私は維新の歴史を以て、日本國民の精神的高潮に達した時期であると思ふ事を申しましたが、精神的高潮と云ふ事は、皆様もよく御承知である。例へば親の病氣など、云ふ事を聞いた時には、我々は十里や二十里の道は一丁か二丁の様にして走つて行く。いざ火事があると云ふ様な時には、平生は箸を擧ぐるさへ重いと云ふ様な人が、箆筒や長持の様な物まで昇ぎ出す。火事が濟んでから、あの力は何處に有つたかと考へて見ても、自分の力の在り處が分らない様になるものである。人間は精神的のものである。精神の力が發揮して居る時に於ては、自分

で自分のしたことが分らない。『史記列傳』に李廣と云ふ弓の名人がある。李廣が或る時に狩に行つた。彼處に虎が居ると云ふので、早速射たらカチッと中つた。行つて見たら石だ。是は妙だ、もう一遍射てやらうと云ふので射たが、もう中らない。其處である。維新史は即ち石に貫いた矢で、維新の改革と云ふものは、皆が精神的に高潮して、石に矢を射込んだものである。石と思はずして射抜いた李廣の虎である。例へば海舟と南洲が高輪で出會つて、互ひに話をした。あ、云ふ氣分に先生方が何時もあるかと云ふとさうでない。南洲先生、海舟先生に、あれは寔に巧く出来ましたが、もう一遍やつて下さいと云つても、それは西郷先生でも、勝先生でも、二度とは出来ぬと云ふに違ひない。尤も芝居なら幾度でも出来ます。御同様でも、是は大分御年を召した方もありませうから、申上げたらよく御記憶になつて居ると思ひますが、例へば日露戦争の時など、云ふものは、我々は慾も無ければ得も無い。唯だどうしたら勝てやうと云ふ事を皆な案じて居つた。又

た明治天皇の御不例と云ふ時に、我々が二重橋の前で禱つた時には、唯だどうか御惱の御恢復あれかしと思つたのであつて、其時の氣分と云ふものは、今から御同様考へて見ても、自分達がどうしてあ、云ふ立派な心になつたかと思ふ様なものである。それでさう云ふ時代は無いとか、それは嘘だとか、それは作り事だとか云ふのは、餘りに人間を輕蔑し過ぎた言葉である。人間も時としては各臭くなる。時としては牛馬の方が、却つて人間より上の方に座つた方がよくはないかと思ふ時がある。然しながら人間が本當の心になつて立向つた時には、神様でも動かす力が出て來るのである。是が即ち赤誠と云ふものである。此力が時に動いて、國民的大運動と云ふものが、出来て來るのであつて、維新の大運動も、是が本であります。

色々長く御話申上げましたが、申上げたい事は尙ほ多くて申し盡せませぬ。皆様方も餘り長く申上げれば御退屈であらうと思ひますから、茲で御話を終りた

いと思ひますが、最後に此頃讀みました外國の新聞に、英人のブーチャンと云ふ人の歴史に就ての演説が出て居つた。其人の云つた事に、「科學的史家の弱點は、人生の複雑なる事を輕視するにあり」。斯う云ふ事を云つて居る。實に其通りであると思ふ。そのみならず私は更に加へまして、「科學的歴史家は餘りに環境と云ふものに重きを置いて、却つて環境に打勝つ所の人間の力を輕く見て居る。」と思ふのである。本當の文明は、環境に支配せられるのでなくして、環境を支配するにある。本當の個人は、環境に支配せらるゝに非ずして、環境を支配するにある。ロード、モルレーと云ふ人も云つた事がある。「進化は力ではない、仕方である。原因ではない、法則である」と其通りである」と。進化と云ふものは力ではない。方法である仕方である。原因ではない法則である。然し進化の法則を實行する所のものは人であり力である。石を投げれば引力の法に依つて下に落ちるけれども、投げなくては落ちない。投げる事は人の力である。それで、世の中は成

るに任せて行けば、成る所まで行き著くなど、云ふのは、是は横著者の考で、さう云ふ横著者が澤山になつて來れば、國は亡びるのである。本當の事は維新の歴史は、自然の作用ではなくして、人間の力で出來たのである。人間の力と云ふものは、天皇が先づ第一に獻身的精神の御手本を御示し下され、我々け又た天皇に向つて奉仕し、國家に向つて奉仕すると云ふ、此の奉仕的精神の結果が、今日を來したのであると私は思ひます。

(昭和四年二月十一日 青山會館にて)

自愛安閑忘寂寞

天將強健報清貧

歴史の生命

一 緒 言

今夕お話を申し上げます事は、別にきまつた題目はございませんけれども、強いて題目を申し上げますれば、先づ『歴史の生命』とでも申ますやうな事であらうかと思ひます。

特に勿體づけて申上げる譯ではありませんけれども、實際今夕この場でお話する事は私におきましては、誠に少からざる迷惑な事でありまして、お前は何を今一番希望するかと云ふ事をお聞きになつたら、早く宿屋に歸つて寝たいと云ふ事が私の一番の希望であります。然し乍ら、先日溝淵先生の御夫人及び萱野先

生ガワザく八代までお出で下さいまして、何か御婦人のお仲間のものにお話を
 して呉れと云ふ事でありました。極めて少數の事のやうに申されましたからして、
 實際時間はございせんけれども、折角の思召なら私も一寸でも罷り出ます、
 と云ふやうな事をお約束したのであります。實際そのお約束をしたのは、私に
 とつては非常な不覺でありました。何うも今更ら悔悟に堪へません。決して兩先
 生を恨らむ譯ではありせんけれども、何んだか私は一ぱい食はされたやうな
 氣持ちがするのであります。

昔曾呂利新左衛門と云ふ人は、豊臣秀吉に澤山のものはいりませんが、何うぞ紙
 袋一ぱいのものを頂戴したいと云ふ事で、紙袋一ぱい位なら何んでも好い、お前の
 望みのものを遣らうと、云ふ事でありました。所が曾呂利新左衛門は、大きなく
 紙袋を造りまして、秀吉の一番大切な御寶藏をすつかり紙袋で覆うてしまつた。

さうして之が紙袋一ぱいのものでありますから、之を頂戴したいと云ふ事で、す
 つかり秀吉をそのペテンにかけた。私は決してペテンにかけて戴いたとは申
 上げませんけれども、實は、約束のときには十人か多くて十五六人のお方だと
 云ふのでありましたが、何う見ましても之れだけの人は十人か十五六人の人々だ
 とは思へないのであります。

さう云ふ譯でございしますが、然し翻へつてみますれば、私のやうな者の話を、
 斯く皆様方に集まつて聽いて戴くと云ふ事は、非常に私も嬉しく思ひます。疲勞
 位は何んでもないと思ひまして、兎に角最善を盡したいと思ふのでございします。
 けれども私は斯う云ふ講演をするには、大體三年位ひの豫約を以つて遣るのであ
 りまして、充分自分にも斯う云ふ事を話したいと云ふ事を考へて出かけて、私
 も申上げる丈けは最善を盡し、お聽き下さる方にもそのやうにして戴くと云ふ事

であるので、序に話をして呉れなどと云ふ、その序と云ふ言葉は、私は大嫌ひ。遣れば第一の目的、唯一の目的としてやりたいのであります。出来る事なれば、御婦人方に例へば三年後に來て呉れとでも云つて戴けば、私も必ず生きて居る限り、その約束を果す爲めにその準備をして來るのであります。しかし、今度は序と云ふ譯ではない。ないけれども、まあ事實、序であつて、殊に今夕などは今まで引張られて、實は先生方がお迎へに來て下さなければ、殆ど捕虜になつて居る。今まで捕はれの身になつたのであるから何んにもない。ホンの私の頭の中に浮んだものを、順序なく申上げるのであります。何うぞ貴女方もそのお積りでお聽きを願ひたい。若し順序をつける必要があれば、皆さまの頭の中で、私の申上げるものを立派に續け合せて、順序をつけて戴きたい。私は、ぼつりくと材料を提供する事にします。

二 歴史の使命

私の考へまするに、一般においては人類として、部分的に申しますれば御婦人方にとつて、最も大切なるのは歴史の教育であらうかと思ふ。歴史の修養であらうと思ふのであります。之は何故であるかと申しますれば、歴史と云ふものは色々の意味に於て、人間に大切でありますが、その内で最も人間に歴史の與へる所の利益の一ツは、人間の視界を高遠、濶達ならしむる。即ち人間の視野を遠く高く廣く大きくならしむるものである。兎角人間は甚だ狭い範圍の事ばかり考へて居る。殊に斯う云ふ言葉を申すと満場御反對であります。素直に申せば、御婦人方は殊に其足元が明るいのであります。足元が明るいと言ふ事は、云ひ換て見ますれば、遠い所が見えないと言ふやうな意味に取れるのであります。足元が明るく、遠い所が明るいと言ふ事であれば誠に結構であります。何でもさう行かない。

顯微鏡は望遠鏡の用をなさない。望遠鏡は顯微鏡の用をなさない。何うも足元が明るくて目の前が餘りに詳しく見え過ぎる人は、何うも大きく、廣く、高く、遠く、見えないものであつて、御婦人方に於てはその點に於て、殊に私は歴史と云ふものが必要ではないかと思ふのであります。

歴史は何故さう必要であるかと云へば、今申上げた通り、所謂眼界が非常に遠くなる。之を横から申しますれば世界を一ツと見るのである。縦から申しますれば古今に通ずるのである。即ち縦横兩視、世界に亘り古今に通じて行くのである。この鍵を握つてさへ居れば、人間は如何なる狭い所に居つても、如何なる寂しい所に居つても、千載に通じ、世界に亘ると云ふ事が出来るのである。即ち、歴史は丁度吾々にとつてはラヂオのやうなものである。私は皆様方が何うか之をめぐくにお備へつけになるが然るべき事ではあるまいかと思ふのであります。で、凡そ人間の文化と云ふ者を象徴するに最も必要なものは、何かと云へば歴史である。歴史を持たない國民といふものは甚だつまらない國民である。歴史のない文學は甚だつまらない文學である。歴史と云ふものは文化の結晶である。又たそれが國民の精華である。

御承知の通りギリシヤ時代に於きましても、人文の一番拓けて行く時に見るべきものは歴史である。ヘロドス、ツキテデス等と云ふ偉い歴史家が出て來たのである。羅馬の時代に於ても同じである。リヴィウス、或ひはタキツスと云ふやうな偉い歴史家が出て來る。支那に於ても司馬遷といふやうな偉い歴史家が出て居るのである。日本に於ても上代に於ては『日本書紀』『古事記』等、近世に於ては『大日本史』『日本外史』と云ふ様なものが、出來て居るのであります。斯の如く歴史と云ふ者は、之を以つて始めて國は國の體裁を爲し、一國の文化は一國の文化たる所の特性を發揮する事が出来るのであります。私は皆さま方が歴史に就て克く御考へになる事をお勧めしたいのであります。

三 新と舊と

然るに今私いまわたくしは色々いろくの立場たちばから申上まをしあげて見みます。歴史れきしなどといいつて古ふるい事ことをかれこれ云いつた所ところで何事なにごとを爲するか、古ふるい事ことなどと云いふものは何なんの役やくにもたたない。世よの中なかは新あらたしい事ことでなくてはならないなど云いふ人ひとがある。しかし、私わたくしは新あらたしいと云いふ事ことについて、非常ひじやうな議論ぎろんを持もつて居をるのであります。一體何たいていなにが新あらたしいか、非常ひじやうに新あらたしいと云いふやうな事ことを吾々われわれは考かんがへて居をるけれども、そんなものは大たい概がい古こいもの、焼直やきなほしである。皆みなさん方がたも御承知ごしょうちの通とほり御當ごたうち地ちはよく知しりませんが、一時御婦人方ごふじんがたの耳みみかくしと云いふやうなものが流行はやりつて居をりましたが、アレは決けつして、今日こんにちに流行はやりつたものぢやない。六千年むせんねんから五千年ごせんねんにかけ小亞細亞せうあじあからユーフラテス、チグリス等なごと云いふ河畔がはんに於おける所ところの人民じんみんが已すでにやつて居をる。何なにうも私わたくしは六千年むせんねん前ぜんと云いふものを、さう新あらたしいとは思おもひません。六千年むせんねん前ぜんに流行はやりつた事ことを、今日こんにち行おこなうて、さうして新あらたしいと云いふやうな事ことは、何なにう考かんがへても私わたくしには解わからるのである。詰つまり、世よの中なかの事ことと云いふものは、新あらたしと云いふ舊ふると云いひ、ぐるぐるめぐつて行ゆくやうに思おもふ。

成程なるほど今頃いまごろ西瓜すいかでも食くへば、初物はつものと云いふかも知しれない。然しかし乍なら昨年さくねんも食たべた。考かんへ見みれば昨年さくねんの秋あきの方が今いまよりも餘程よほごほ早はやい。昔むかしの人ひとの句くに斯かう云いふ意味いみの句くがある「秋口あきぐちの西瓜すいかはごろりと賣うらるる」、秋あきになると何なにうも、西瓜すいかがだんぐり賣うれなくなるから、投なげ賣うりをする。丁度女ちやうどおんながお嫁よめに行ゆくの、年としをとるとだんぐり急いそがなくなるとはならなくなる。始はじめの間あひだは好よい旦那だんなをと云いふ事ことで、しきりに望のぞんで、自分じぶんは斯かう云いふ人ひとが好よい。自分じぶんは斯かう云いふ人ひとでなければならんと云いうて、相場さうばが非常ひじやうに高たかいのである。然しかしだんぐり年としが行ゆくと、だんぐり相場さうばが安やすくなつて行ゆく。始はじめは大だい臣じんでなければ行ゆかないと云いつてゐたのが、終しまひには判任官はんにんくわんでも好よいと云いふ具合ぐあひに、秋口あきぐちの西瓜すいかはごろりと投なげ賣うりされるのであります。西瓜すいかも始はじめは何なにうしても

五圓でなければ賣りかねたのを、秋になると五十錢でもよい。ほしくば無代でも好いと云ふ。斯う云ふ事を云つた句であります。然し私は決して貴女方を悪く云つたものではありません。

さう云ふ事であつて、秋口には西瓜が餘り賣れない。安くなるけれども、西瓜から云うて見れば、西瓜はやはり秋になつたからと云つて、さう下落すべきものでない。西瓜自身から見れば上げたり下げたりせられる事は餘程迷惑である。たゞ世間の相場がついて斯う云ふ風に安くなつたり、高くなつたりするのである。然し世の中に、早いとか、晚いとか古いとか新しいとか云ふ事は、第一は比較の言葉であり、第二は見當の言葉である。世間の人々が、新しいとか、古いとか、云ふ事は、物の比較に於て、新しいとか、古いとか云ふ分類をつけるのであるが、物そのものには古い事もなければ、新しい事もない。大概それは當り前の事である。

四 平等的觀察

歴史と云ふものに一番大切な事は何んであるかと云ふと、第一番に平等と云ふ事である。平等観と云ふ事を握つて居らなければ、歴史をつくる事は出来ないのである。平等観と云ふことは何んであるかと云へば、苟くも此處に人なら人と云ふものがあります。この人間は昔の人も今の人も人間である。西洋人も日本人も人間である。日本人が寒いと云ふ時に、西洋人が暑いと云ふ事はない。やはり寒い。たゞその寒さを感じる度合は違ふかも知れん。然し乍ら寒い事は同じことである。昔の人の人情やなんかに、何も變つた事はない。今の人はラブレター等を書く場合、桃色の紙やなんかに書いて居る。昔の人は象形文字で、煉瓦に書いたものである。その煉瓦も火にかけたものでなく、天日で固めた煉瓦に象形文字を書いたのである。今は何うかと云ふに、泉筆の小さいもので、くるく曲つたやう

に書き、昔の人は象形文字を斯う云ふ風に(手真似) ぎこちなく書いて居る。紙は柔らかい。煉瓦は固い。日本の文は丸い。象形文字は四角。然しその相思の情、相戀の情を充たさうと云ふ意味は同じ事である。昔も今も情に變る事はない。昔もやはりこの戀愛問題と云ふやうな事は、世界歴史上にも澤山載つて居るが、トロヤの戦ひのやうな事を以つてもお解りになる事であり、日本の古い歴史を御覽になつてもよくお解りになる事である。それでこの平等觀と云ふものをよくやつて見ますれば、孔子様だから吾々と違つた人であると云ふ様な事はない。私が砂糖は甘いと云ふ時、孔子様がなめれば辛くなり、お釋迦様がなめられた砂糖が酸つぱくなると云ふ事はない。やはり砂糖は孔子様がなめても甘いのである。鹽はお釋迦様がなめてもやはり辛い。その所をよく合點してみなければならぬ。兎角その歴史や何かを讀む時は、よくこの間違ひをする。アノ人は豪傑だ。アノ人は豪傑だから、何うも親子の別れの時に泣く筈がない。泣いたのは後から作つたのであらう等と云ふ事は、豪傑にとつては大迷惑、西郷先生だから決してつまらない事には怒らない。怒ると云ふ事はないと思ふかも知れないが、西郷先生でも腹が立てば、或ひは小使を叱る事もあらう。

一寸と、こゝに西郷先生のお話を申し上げますと、丁度明治五年の六月頃か七月頃か、六七月頃の事、お上には九州に御巡幸遊ばされて、熊本にお出になつた。その時に熊本の舊藩主の細川家の獻上した龍驤艦と云ふものに乗つてお出でになつた。私はこの頃小さい子供で、高橋往還の道端に座つて拜んだ事を記憶して居ります。

その時に、陛下がいよいよ熊本をお立ちになつて、鹿兒島に御巡幸遊ばされる事になつた時に、お船はやはり百貫沖から出る事にさまつた。その時は海軍の大夫と申しましたが、海軍の重なる人は川村伯——川村純義君、鹿兒島の人で、西郷先生と一緒にお伴の中にあつた。小島のなにがし——之れは陛下の御駐輦にな

つた所。一寸お小休み遊ばした。御承知の通りにあの方面の潮の干る事は非常な
 のでも、干満の度が非常に激しい。幾ら何うも西郷先生が偉人でも、潮が差して來
 ない。西郷先生は天下の豪傑である。けれども潮の干満までも支配する力はな
 い。何うしても潮が來ない。夕陽はさして來る。暑くはあるし、お上は二階におい
 でになるが、その暑さは一通りでない。其處に西郷先生が來まして、川村伯に向つ
 て喧嘩を仕掛けた。「お前も苟くも海軍の大夫と云はるゝものが、潮の干き満ち位
 わかるべき筈ではないか、斯う云ふ所にお上をお待たせ申上げるやうでは怪しか
 らぬ。お前の職責に對して濟まんではないか」と云ふ事を非常に入釜しく云うたさ
 うであります。私自身はその場には居りませんが、吾々の先輩高島鞆之助と云
 ふ人から——これも偉い人だと思ふのであります——その人がよく私に話をし
 ました。あの時の西郷さんの怒り方はひどかつたさうで、川村伯は仕方なく好い
 加減な返事をして居る。お上はそれをお聴きになつて、ニコ／＼お笑ひになつて在

らせれたと云ふ事でありますが、さう云ふ事を考へても、西郷さんは深思重行な人
 でありますから、つまらない潮の満ち干が遅いと云ふ事位で怒る筈はない、それ
 に怒つたと書いたのは間違ひではあるまいかと御考へになられる方があれば、そ
 れは全く人間の所謂平等觀を離れた人の話である。
 それは孔子様でもお腹が空いた時は、やはりペコ／＼した。御承知の通り、夫子が
 糧を斷られたとき子路が「君子も亦窮すること有乎」と問うた所が、孔子は「君子も
 固より窮す」と答へた。「固窮」それは勿論の事であるが、「小人窮斯濫矣」小
 人は窮すれば斯に濫れる。而し君子は如何にペコ／＼に腹がへつても、辛棒して
 居るのぢや。腹はへつても空腹じくない。然し小人は隣の畑の薩摩芋を掘つて食
 たい。向うにある所の大根を抜いて嚙ぢりたいと云ふ。小人と君子の違ひは之れ
 だけの事である。孔子様が答へられた事を見れば、やはり孔子様なんかも當り前の
 方である。「原壤夷して俟つ」原壤と云ふ者が、胡坐をかいて孔子様を待つたが「杖

を以て其の脛を叩く、孔子は其の脛を杖で打たれたと云ふ事が『論語』に書いてある。『論語』を見れば孔子様でも人を殴らないと云ふ事はない。やはりなぐつて居る。「七十にして心の欲するところに従へども矩を踰ず」と断つて居るのを見ると、七十までは随分矩を踰たに相異なる。

人間も七十になればもう總ての動物性の慾は去つてしまふから、矩を踰えやうとしても、普通の人は一寸踰え難い。踰えやうとしても、何うも蒸氣機關が動かない。火が燃えない。何うも「矩を踰えず」などと云つて孔子様が修養したやうに話をなさる方もあるが、事實は孔子様の體力が衰へたと云ふ事を物語るものであつて、孔子様自身の力で矩を踰えやうと若し考へられたらそれは孔子様の間違ひ。私は孔子様に「あなたの御修養も結構でありますけれども、あなたの老年をお考へなさい」と斯う申上げたいやうな氣持がするのであります。さう云ふ譯であります、平等觀から見ますれば、今日世の中には聖人もなければ賢人もない。君子もなければ凡人もない。熊本で團子汁と云ふものがある。それは一つの鍋に入れて食ふ、さう云ふものである。團子汁を平等觀で見れば、何か色々入れてはあるが、ドロ／＼になつて解らない。兎に角中に入れてあるものは、團子汁の部分とそれ／＼造る所の一要素に過ぎんだ。歴史も平等觀から見れば團子汁の鍋のやうなものである。總てのものをかきまぜて見ると全く何もかも一つになつて見えるから、非常に世間が廣くなつて、自分の氣分も清々して来る。皆んな自分より偉い人ばかりだと見れば、自分が非常につまらなくなる。けれども何も同じだと云ふ事になれば、自分の氣分も何んとなく清々として来る。人間と云ふものは不思議なものであります。自分がころげたとき、自分獨りがころげると氣持が悪ければ、自分がこけて、隣の人もこける、後の人もこけると愉快な氣持になる。之は何うもあんまり感心したものではないけれども、感心するとか、せんとか云ふやうな事はそれは議論である。然しさう云ふ事は之

ば賢人もない。君子もなければ凡人もない。熊本で團子汁と云ふものがある。それは一つの鍋に入れて食ふ、さう云ふものである。團子汁を平等觀で見れば、何か色々入れてはあるが、ドロ／＼になつて解らない。兎に角中に入れてあるものは、團子汁の部分とそれ／＼造る所の一要素に過ぎんだ。歴史も平等觀から見れば團子汁の鍋のやうなものである。總てのものをかきまぜて見ると全く何もかも一つになつて見えるから、非常に世間が廣くなつて、自分の氣分も清々して来る。皆んな自分より偉い人ばかりだと見れば、自分が非常につまらなくなる。けれども何も同じだと云ふ事になれば、自分の氣分も何んとなく清々として来る。人間と云ふものは不思議なものであります。自分がころげたとき、自分獨りがころげると氣持が悪ければ、自分がこけて、隣の人もこける、後の人もこけると愉快な氣持になる。之は何うもあんまり感心したものではないけれども、感心するとか、せんとか云ふやうな事はそれは議論である。然しさう云ふ事は之

は事實である。議論は議論として、事實について申上げるとさう云ふ譯であります。

歴史の總ての事を今申しました通りに、平等觀で見ても、團子汁の鍋の中に總てのものを入れて、ぐらぐらたぎらせて見れば、如何にも總ての事がよく判る。さつぱりする。總ての事が非常に面白い。併し之れで話が終りになれば私のお話は漸く半分をお聞きになつた事になるのである。もう少し聽いて戴かなくては、私の申上げる事は達しないのであります。

五 差別的觀察

今申した通り一方からは、東西なく、古今なく、上下なく、差別なく、所謂無差別平等觀と云ふ事が必要である。併しそればかりでなく、一方においては、やはり差別觀と云ふものをもつて、世の中の事を見なくちや駄目である。差別觀から

見れば、昔の人と今の人とは違つて居る。日本人と西洋人とは違つて居る。日本人の内でも、東北人と九州人とは違つて居る。九州人の内でも熊本人と鹿児島人は違つて居る。熊本人の内でも城南と城北は違つて居る。同じ熊本市の内でも唐人町と坪井とは違つて居る。ダンク云つて見れば、向うの家と自分の家とは違つて居る。もう少し進んで自分の親と、自分とは違つて居る。自分の姉と自分の妹とは違つて居る。もつと云つて見れば、昨日の自分と今日の自分とは違つて居る。明日の自分も違つて居る。明後日の自分は更に違つて居る。平等觀から見れば、世の中のもの皆んな一緒であるけれども、差別觀から見れば一ツとして同じものはないのであります。

今日一寸散歩がてらに、久し振りで水前寺に出かけて見ましたが、あそこに泳いで居るアプラメ、或ひはハエ又たはイダ、あゝ云ふものはぞろぞろ泳いで居るが、どのアプラメも、どのイダも、どのハエも皆んな同じやうに見える。然し乍ら彼等

はそれ／＼に個性を持つて居る。私は學者でないから、アブラメの研究を茲に何うも發表するほど何も研究して居ない。然し乍ら、あのアブラメは皆同じやうに艶々として居るが、あれで一疋々々比べると違つて居る。さう云ふわけである。柿も自分の宅の庭になる時は、どの柿もどの柿も同じやうであるけれども、ちぎつて見ると何處かに違つた所がある。或ひはゆがんでゐたり、何處か違つて居る。皆さまのお顔でも右と左は違つて居る。足でも右の足と左の足は違ふ。その違ふと云つても一方が七文で、一方が十文等と云ふほど違つては居ないが、然しやはり少しづつ違ふ。私はどうも自分の足が何の位違ふか知りませんが、足袋をはいて見ると、一方はゆるくあるやうで一方は堅くあるやうにある。それで少しは違ふのであらうと考へて居る次第であります。さう云ふ譯であつて、差別観から見れば、非常に差別がある。私は先づ第一着に平等観で總てのものを見てしまつて、その次ぎは、差別観で分類をして、さうして

昔の人はこの通り、今の人はこの通り、西洋人はこの通り、日本人はこの通り、支那人はこの通り。斯う云ふ風に分類して行くと云ふ事が、必要であると思ふのであります。この二ツの鍵と云ふものが非常に私には必要であると思ふ。この二ツの鍵を以つて、歴史を解釋しなければ駄目である。平等観のみあつて差別観のない歴史家は、歴史の眞髓が解らない。又た差別観のみあつて平等観のない歴史家は、歴史の目的と云ふものが解らない。到達點が解らない。この二ツをよく用ひると云ふ事は、歴史を研究する上において非常に必要である。この二ツの鍵さへ握つて居れば物事がよく判つて行くのである。私は之によつて皆さん方に、御研究になつて戴きたいと思ふのである。世の中で日本のある事を知つて、世界のある事を知らない人は、差別観に捉はれて平等観のわからない人だ。世の中に又た世界のある事を知つて、日本のある事を知らない人は、所謂平等観に捉はれて差別観がない人である。昔の禪學者の申した言葉に、「差別なき平等は

悪平等だ。平等なき差別は悪差別である。眞の差別には必ず平等が伴ひ、眞の平等には必ず差別が伴ふ。斯うあるのである。之は單に佛教の研究の上からばかりでなく、歴史を研究する上においても最も必要なものであります。斯う云ふ點について私は歴史を研究し、進んで日本の歴史について研究して見たいと思ふ。斯う云ふ譯でもう少し申し上げて見たいと思ふのであります。

六 日本と英國との歴史的相異

日本の歴史と云ふものを、今申した通り平等觀から見て觀れば世界人類の歴史の進歩と同じ途をとつて進んで居る。日本のみが別の途をとつたのではない。世界人類發達の歴史と一緒に進んだのである。然し乍ら差別觀から見れば、日本の歴史と云ふものは他國の歴史と非常な異つた點がある。それを一々私は詳しく申上げたいと思ふのでありますけれども、時間が許さな

いからその内の一つか二つを例にとつて、申上げて見たいと思ふ。假りに私は英國と支那、この二つの國を例にとつて日本の歴史と對照して見たいと思ひます。私の推斷によりますと、英國の歴史と云ふものは權利から發足して居る。即ちライト、權利から發足して、權利と云ふものを守る。權利をとる。權利を犯したものと戦ふと云ふ事である。權利と云ふものがずつと發足點である。英國の歴史を御覽になればよくわかる。例へばキング・ジョンの時に彼のマグナカルタはジョンを脅迫して、出來た所のものである。それからチューダー卿に至つては貴族、僧侶若くば地主と云ふやうなものが、共に競争をして居るのである。さうして近く千八百年代に至つて、議員の選舉法の改正に至るまで、皆んな權利の競争。一方は渡すまいとして、一方は取らうとして、その競争でずつとやつて居る。この國の歴史は非常に面白い歴史である。イギリス人と云ふものはやはり世界における偉い民族、權利と云ふものを非常に大切にす。この權利を擁護す

ると云ふ點においては、萬障を廢してやつて居る。之は實にイギリス人の一ツの特色である。イギリスの歴史を御覽になれば之れほど明白な事はない。所が日本に、はこの權利競争の歴史と云ふやうなものは殆んどない。日本では臣民が未だ曾て天皇に向つて權利を争うた事はない。臣民は始めから天皇に奉仕すると云ふ事を目的として居る。即ち日本の歴史は義務からして出發して居る。イギリス人と日本人は足の踏み出しの所が違ふ。イギリス人は權利と云ふ方から踏み出し、日本人は義務、奉仕と云ふ所から出發して居るのである。

イギリスでは帝は帝の權利を、人民は人民の權利を、互ひに主張し、火花を散し合つて、それからイギリスの文化と云ふものが出來て來たのである。日本では天皇は人民を愛撫すると云ふ事を目的として居るのである。人民は又た天皇に仕へると云ふ事を目的として居るのである。之れは『萬葉』の昔から、『古事記』の昔からさうである。之れほど違つて居るから面白い。英國人が世界に向つて誇る

べき所は、自分の歴史は權利を發足點として何處までも權利によつて發達して居ることであるが、日本人が世界に向つて誇るべき所はさうぢやない。義務と云ふ所を發足點として、それから發達して居るのである。

元より歴史と云ふものは、繪で書いたやうなものぢやない。圖を引いたやうなものでもない。定規をあて、書いたやうなものではない。時として規則に、はまらない事がある。

歴史は決して數學の問題のやうに、題を設けて答案が出來るやうなものでない。自然の發達であるから、自然の發達には時には除外例と云ふものがあるのは不思議ではない。除外例から見れば、お前はさう云ふかも知れないけれども、斯う云ふ事もあるぢやないか、さう云ふ事もあるぢやないかと云つて、若し貴女方から私の揚げ足を取らうとお考へになれば、幾らでも取る事がありませう。然し、世の中に揚げ足をとる位愚かなものはない。其處は前に申上げた綜合大

観と云ふ事をして、主なる事實を認めて行かねばならぬ。今年こんねんの蠶かひこは豊作ほうさくだと云つても、或る所の蠶かひこは腐くさつたかも知れない。一部分ぶぶんの所ところが腐くさつても、何なにうも、今年こんねんは凶作きようさくだと云ふ事は出来できない。熊本縣くまもとけん一帯いたいについて、始めて熊本縣くまもとけんが凶作きようさくだ、豊作ほうさくだ、と云ふ事が云へるのだ。歴史れきしもその通りとほり。單たんに一ツ丈ただけの事實じじつではなんとも云へる譯わけのものではない。日本にほんなら日本にほんの歴史れきしの始はじめめから終おはりに至いたるまで、それを連ねて見て始めて日本にほんの歴史れきしの特色とくしよくと云ふものが解わかるのであります。

私わたくしは此等こゝらの點てんが歴史れきしを研究けんきゆうするに就ついて、最も考かんがふべき所ところであると思おもふ。それ等の事ことは皆みなさんが御研究ごけんきゆうになればよく解わかる。

徳富蘇峰とくふそほうは自分じぶんの都合つがふの好よいやうに、歴史れきしを製造せいぞうして居をるやうにお考かんがへになる方があつたらそれは間違まちがひで、貴女あなた方がアイスクリームアイスクリームを拵こしらへるやうに、歴史れきしを私わたくしが製造せいぞうして貴女あなた方に御馳走ごちそうすると云ふ事は出来できない事ことであつて、私わたくしは、たゞ歴史れきしの事實じじつを綜合對照さうがふたいせうして、斯かうであると云ふ事を、申上まをしあげて居をるのであります。

七 日本と支那との歴史的相異

もう一ツ。今度は支那しなを例れいにとつて申上まをしあげるのであります。支那しなに就つきましましては、國くにの組織そしきと云ふものは何なにんであるかと云へば「王侯將相おうこうしょうしやう寧しゆんぞ種有しゆあらん乎や」と云ふ事ことであつて、漢かんの高祖かうそが天下てんかを定さだめた時ときに、その高祖かうその家來けらいに黥布けいふと云ふものがあつて、それが謀叛むはんをした。その時ときに漢かんの高祖かうそが征伐せいはつに行いつて黥布けいふを生捕せいほにした。そして高祖かうそが云ふのには、「何なんぞ苦くるんで叛はんする」黥布けいふは「帝ていたらんと欲ほつするのみ」と答こたへた。之これが支那しなの國體こくたいである。それで、袁世凱えんせいかいなども「世よの中なかがだんく變かはつたからして、何なにうでもかうでも帝位ていゐをお廢やめになつた方が宜よろしい」と云つて、御承知しようちの通とほり宣統帝せんとうていには辭職じしよくを勸告くわんこくしたと云ふよりも、辭職じしよくを強要きやうやうして共和國きやうわこくを

造つた人である。さうして自分は皇帝と成らんとして、わざ／＼洪憲と云ふ年號までも拵へたのである。所が日本の苦情によつてそれは癩めたのでありますが、之れが即ち支那の國體である。支那では力の強い者でさへあれば、何時でも帝王と成れる。それで帝王と云ふものは、支那では丁度優勝旗のやうなものである。勝つものが取る。優勝旗と云ふものは、何處にも所有權が決まつて居らん。勝つ人によつてくる／＼廻つて、行くものである。それで支那では帝王の位と云ふものは、優勝旗と變る所はないのである。然るに日本はまるで違ふのである。日本では日本の歴史があつてより以來、未だ曾て眞面目に天皇陛下の位地を睨つたものはない。若し争ひがあれば、皇族方御自身の争ひであつた。然し臣民と皇族との間の争ひと云ふものはない。水戸義公と云ふ方は實に偉いお方でありました。この人が『叛臣傳』と云ふものをお作りになつて、謀叛人の事を特別に書かれたのでありますけれども、日本では本統の意味に於いて謀叛を爲したものは、歴史には無

い。之れは何處の國とも違つて居るのであります。何時も謀叛人の例になるのに平將門があるが、將門と云ふ人に就て今此處に色々議論すると永くなりませんが、將門と云ふ人を謀叛人などと云ふことは、將門を買ひ被つて居る。あの頃はやはり政黨の争ひ。之れは即ち平等觀で御覽にならなくてははいけない。熊本縣あたりにも政黨と云ふものがあつて、之れはやはり始終何處でも争うて居る。然るに今日は新聞もあれば演説も出来る。色々の事柄があるからして、互ひに争うて曲直を闘はして居る。然し乍ら争うては居るけれども、只争ふだけであつて、總ての事が道場で擊劍をするやうなものである。叩き合つて不幸にして怪我をしても大怪我はない。然るに昔の政黨は新聞もない、演説もない。平將門も、あれは關東に於いて反對黨と色々争うて居る。その争ひには政治上の争ひや、地面の争ひばかりでなく、女の争ひもあつた。將門は戀に破れ、財政に破れ、自棄のやんばちになつて暴れ出したものである。さうすると反對黨はこ

の機會を以て、彼をやつつけやうと「正しく將門は謀叛でございませう」と注進した。今で申せば、丁度不敬罪に當るのである。その時は電話もなく、電報もない。なか／＼どうも關東から京都までに色々の事をやつて行くには時間がかつた。將門も色々と辯解の言葉を云うて見た。一度は自身が出掛けて辯解して見たけれども到頭いけない。自棄のやんばちになつて色々と暴れ出した。もう暴れた以上は、自分で自分が解らなくなつてしまつて發狂した。發狂した將門と云ふものは、あれは歴史上の人物ぢやない。あれは氣狂ひ病院に入れるべきものである。お醫者さんにかけて好いのであつて、歴史家の取扱ふべきものではない。

八 日本史の特色

然し、私が斯う申上げたからと云つて、將門に同情すべき點があつて、その謀叛に同情したのではない。私は決して熊本まで來て將門を辯護して居るのではない。別に將門の依頼を受けたり譯でもない。又た私は將門が好きでもない。私にはあれは若旦那が増長して自棄で到頭氣が狂うて、氣狂ひになつたものだ。斯う云ふ風に私は考へて居る。それは何故かと云ふに、世の中にさう云ふ事は幾らでもある。それを『叛臣傳』などと云つて、日本で天皇陛下に眞面目に弓を引いたものゝ内に加へると云ふ事は、歴史を根本的に誤解して居るのではないかと思ふのであります。

日本には足利尊氏と云ふものが居る。なる程尊氏は後醍醐天皇に向つて弓を引いた。けれども、いくら尊氏が悪い者であつても、尊氏の目的は只征夷大將軍に成るだけであつて、天皇様に成りたいなど云ふ考へはなかつた。兎角徳富は悪者の味方のみをして居るから、汝も悪者ではないか、悪徒のみに味方をする奴は、やはり悪徒ではないか、と思はるゝ方があるかも知れないが、悪徒の乾兒でもなければあまり悪者でもない。

日本人の内にはさほど悪徒は居らない。殊に君に對抗するやうな悪徒と云ふのは殆んど日本人には居ない。尊氏の場合は只公家が威張つて、公家が自分の世の中のやうに威張つて居た。それで自分が武家で行かうと云ふ時、だん／＼やつて行く内に薬がき、過ぎてあゝ云ふ事になつた。遂には尊氏も良心が咎めて、その爲めに後醍醐天皇の尊靈を弔ひ奉る爲めに、天龍寺などを造つた。又たお經の寫本等も色々自分から書いたのは、彼は心から決して後醍醐天皇に向つて弓を引く所の悪徒ではなかつたことが良く解ります。只勢ひ餘つてあゝなつたのであつて、私は彼を決して悪徒とも云はない。辯護もしない。然し彼は如何なる事があつても、帝位をどうかうすると云ふほどの悪徒ではない。彼と雖も天皇陛下の御位地は、即ち神聖にして冒すべからざるものと云ふ事は考へて居る。その横暴と云ふ程度から云へば、足利氏よりも北條氏の方が横暴であるが、その横暴な北條氏でさへも、承久の亂の時、義時の命を受けて泰時に向つた時に、「若し後鳥羽上皇

が、自ら御出向きになつた時は何うするか。」その時には、馬より降りて、兜をぬいで、上皇の前に平伏して、仰せを聴くより外はない。」と斯う云ふ事を云つて出掛けたのである。日本におきましては楠正成のやうな忠臣も、乃木將軍のやうな忠臣も、時としては將門のやうな者も、時としては尊氏のやうなものもある。然し乍ら概して申しますれば、日本の臣民に於て、未だ曾て「帝たらんと欲するのみ」と云ふやうな事を云つた者も、又た考へたものもない。決してない。斷じてない。之れは日本國民の特色の一ツではないかと思ふのであります。斯う云ふ事に關して、色々貴女方が御理解になつてお出でになれば、どの位世の中の總ての事に、活眼を開く事が出来るか知れぬ。要するに歴史は科學ではない。將來或ひは科學になるかも知れんけれども、科學になる時の歴史と云ふものは、面白くない歴史が出来るであらうと思ふ。私が見る所では、歴史は一面に於ては藝術であり、一面に於ては科學である。云うて見れ

ば科學と藝術との混血兒である。その歴史と云ふものは、人間に何を教へるか
 と云へば、今申上げた通りに、色々の事を教へるが、殊に吾々人間に本當の意味
 に於ての、人間學を教へる所のものは歴史より外にはない。即ち日本の歴史は、
 更に吾々をして、單に吾々を世界の人民としての人間學を知らしむるばかりでな
 く、日本の臣民として、吾々が盡すべき所の、人間學を知らしむるに於て、之よ
 り以上必要なものはない。之より大切なものはないと考へて居るのであります。
 未だこの話は充分に徹底して居らないけれども、遺憾ながら此處で切り上げ今
 夕は此れで御免を蒙ります。

(昭和四年六月四日、九州日日新聞社に於ける、櫻蔭會熊本支部主催婦人講演會にて)

維新史の前提としての日本史の概念

一 維新史とは何ぞや

閣下竝に諸君、此の昭和聖代一つあつて、二つ無き御即位の大禮を行はせ給ふ秋に
 於きまして、我が日本帝國の重きを荷ふ各青年團代表者諸君に向つて、私の平生懷
 抱して居る所の意見を開陳することを得ますことは、私にとりまして洵に愉快な
 る任務であり、且又光榮なる任務であります。私は此際に於て平生私の研究
 したる所の一端を陳べて、茲に皆様のお教へを乞はんと思ふのであります。若し
 私の申上げる事に就て、間違つたことがあるとお考へであれば、どうぞ御遠慮な
 く御質しを願ひたい。又私の申上げたる事に就て取るべきことがあれば、幸
 にそれをお取り下さつて、さうして、どうか皆様御自身だけでなくして、お歸り

の上は其の意味をどうぞ同志の諸君にお傳へ下さらんことを、特にお願いして置く次第であります。

元來昭和の御代は、明治の御代の延長であります。明治の御代は、神武天皇以來の延長であります。それで近代の日本、即ち昭和の御代を諒解せんとするには、先づ明治の御代を諒解せねばなりません。明治の御代を諒解せんとするには、神武天皇以來の日本の歴史を諒解せねばなりませんのであります。維新と申すことは昔ながらの言葉でありますが、此の言葉は今日に於ても、猶ほ適切であつて、所謂千古不磨の名言であります。不肖私は明治天皇の御宇の歴史を編述せんと心掛けて居ります。然しながら日暮れて途遠く、神武天皇からのことには筆を執る暇が無いので、已むを得ず織田、豊臣時代から筆を起して、今日は漸く孝明天皇の安政年間に及んで居るのであります。果して私の生きて居る間に『明治天皇御

宇史』まで書き及ぶことが出来るや否や、自分ながらも半ばは疑ひ、半ばは虞れて居ります。然しながら天若し私の志に賛して呉る、ならば、私の生きて居る間に必ず此志を遂げさせて呉れると思つて、今日猶ほ努力中でありませぬ。其の努力をなしつつあるに際しまして、私は維新の歴史の前提として日本史の概念に就て、皆様のお教へを乞ふと云ふことは、之は今日私が思出したことではなくして、私が此の最近十年間、其の十年間の準備をする爲めに更に二十年間、合せて五十年間私の頭の中に往來して居る所の日本歴史の概念に就て、是から皆様のお教へを乞はんとするのであります。抑々維新の歴史は帝國三千年來の歴史中、他に其の比類を見ざる所の、大和民族の精神的最高潮に達したる、唯一と言はざるまでも、第一の時代であります。聖明なる天皇、偉大なる人物、忠良なる人民の一大武士的精神の現はれたる時代であります。此の時代は今日より長くて百年、近くは五十年に過ぎませぬが、不幸

にして此の維新史の真相は世に現はれて居りませぬ。世の中には随分間違つた考を有つて居る者もあります。私は今更此の間違つた考に就て、一々茲に辯駁は致しませぬ。然しながら或人は維新の大改革を以て、恰も孝靈天皇の御代に、一夜の中に琵琶湖が出来、一夜の中に富士山が聳えたと云ふ如くに、考へて居る者があります。西洋人の中にも、斯の如きことを書いたものがあります。或は維新を以て幕府が財政の逼迫からして、幕府自ら倒れたと云ふやうなことを言ふ人もあります。或は薩長二藩の陰謀で、斯の如き事が出来上つたといふ者もあります。或は建武同様、公家が武家に代つたといふ者もあります。或は専ら外國の刺戟によつて、斯うなつたといふ者もあります。或は富が武力に打勝つたといふ者もあります。いろいろの説を爲す者がありますが、就中外國人の中にも、特に日本に長く居つて日本をよく知つて居る所の、英國人のチェンポレン氏の説の如きは、最も間違つた所の考を以つて世の中に流布して居ります。

茲に皆様に御覽に入れませんが、之はチェンポレン氏の書いた小冊子であります。之を見ますと「日本といふ國の忠君愛國等と云ふことは、爲政者階級が最近に人心を籠絡する爲めに製造したる日本の宗教である。武士道等といふことは、千九百年までは日本の辭書には一切出て居ない。斯ういふことを書いてあるのであります。即ち日本の尊王愛國の精神と云ふものは、爲政者階級が人民を治める爲めの一つの方便、一つの道具、一つの作爲であると論じて居る者であります。時としては西洋のこのみを摸倣する、所謂新しがりやといふ様な人には、斯ういふ議論は金科玉條のやうに聞えるかも知れませぬ。私は一々それ等の事に付きまして、それを辯難攻撃する者ではありません。然しながら皆それは間違つて居ります。チェンポレン氏の如きは、原因と結果を取違へて居るのであります。日本の維新は忠君愛國の結果から出来たものである。忠君愛國が其の原因であつて、維新が其の結果である。チェンポレン氏の如きは、維新が出来上つてから、忠君愛國

を製造したものであると云ふので、まるで原因と結果とを顛倒して居るものと私は存ずるものであります。

維新史を考察する上に於て、豫め心得おくべきことは、三千年に互る帝國の歴史の主なる事相であります。私は茲に三千年といふ字を使ひましたが、之は日本の歴史に載つて居るのが三分の二、載らざるものが三分の一であります。日本國は決して日本歴史が始まつた時に始まつたのではない。歴史無き以前、所謂有史以前より始まつて、而して後に始めて歴史が出来たのである。歴史あつて而して後に、民族があるのではありませぬ。歴史あつて後に、國家があるのでありませぬ。國家あり、而して後に歴史といふものは出来たのであります。國家の壽命、民族の壽命は、歴史を標準とすることは出来ない。歴史以前に遡らなければ、歴史と云ふものは解らないのであります。それで日本の歴史が何千年と云ふことは、歴史に書いてある其の以前まで考へなければ、本當の日本の歴史は解らないのであります。歴史といふものは要するに一個人に例へて見れば、丁年に達した以上のことであつて、人間一個人のことを考へて見ても、丁年に達するまでに、既に一生の三分の一は過ぎて居るのである。若くは四分の一を過ぎて居るのである。どうか貴君方も日本といふものは、『古事記』あり、『日本書紀』があるが、それ等のものに書いてあるよりも、もう少し古いといふことを考へにしなければならぬのであります。

二 皇室と歴史

是から日本の歴史の特色に就て申上げたいと思ひますが、私は此際お断りを申して置きたい。一時間以内に日本の歴史を申上げるのであるからして、到底語つて審かにならぬのが當然である。徳富が話すことはまるで風を捉ふる如きものである。聞いた時には何だか物があるやうであるが、歸つて見れば何も無い。歸つ

て皆様がお土産に話をなさうとしても袋には何も無い、風である。風を袋に入れやうとすれば、ゴム袋でなければいかぬ。私も此點は甚だ遺憾としますが、此の場合に於て、私が日本歴史を悉く申上げるといふことになつては、少くとも一ヶ月の時間を要するので、お聴きになる貴下方も御迷惑でありませうが、話をする私は尚ほ迷惑であります。已むを得ず私は茲に要領を申上げて置きますが、此の要領を何とか御記憶下さつて、其後は御銘々に歴史によつて御研究になれば、恐らくは當らずと雖も遠からずであらうと思ふのであります。

第一に述べたいことは、日本歴史は、一面國民の歴史であると共に、皇室の歴史であります。英國等ではワザ／＼英民族史と民といふ字を特に書いてありますが、日本では私は『近世日本國民史』と名づけて居りますけれども、國民の歴史を書く時には、どうしても皇室の歴史を書かなければ出來ないのであります。それは何故であるかといふと、皇室史として存在するばかりでなく、國民史としても存在す

るからであります。更に要約すれば、皇室は日本國民の中樞であつて、網の手許の如きものである。網が四方に廣がつて居るが、之を手操れば手許の一筋に歸着するのであります。之は單に奈良朝若くは平安朝ばかりでなく、鎌倉時代に於ても、足利時代に於ても、徳川時代に於ても亦然りであります。足利時代、徳川時代は皇室が最も式微でありましたが、然しながら室町、徳川の兩時代に於てさへも、日本では皇室を外に置いて、日本國民史といふものは絶対に書けるものではありません。之は私が十年間苦心して書いて居るのでありますから、私自らが経験して皆様に申上げて居るのであります。而も私が十年間の経験に於てかく確信するのであります。

三 皇室と國民的大運動

第二には、日本に於ては天皇及び皇室が概ね——悉くとは申しませぬ、概ね國民

的大運動の率先者たり、教導者たり、而して又た中心者たり、謂はば天皇が概ね國史上に於ける大事件の大元帥であります。日本の歴史が天皇中心であると云ふことは、天皇が日本の歴史の首位に立ち、日本國民を引張つてお出でになるからのことである。所謂國民的大運動の首腦者でお出でになるのであります。世の中では上に立つ者を、まるで笠か帽子のやうに考へて、唯外へ出る時にだけ帽子を冠るやうな考へで居る者もあります。外國では皇帝等と云ふものは帽子のやうに考へて、夏は麥稈帽子、時としては烏打帽、やれ今年は斯ういふ帽子が流行るなどと言つて、皇帝を勝手次第に取替へて居るものがあります。

然るに日本に於ては天皇は帽子ではありませぬ。天皇は首であります。天皇は頭であります。天皇は國民の最も大切なる首腦部であります。如何なる身體でも、頭から總ての運動が湧出する。丁度其通りであります。日本に於ては、日本の國民的大運動といふものは、天皇が主としてお始めになる、天皇が主としてお導きにな

る。而して天皇が主としてそれを成就あそばされて居るのであります。其例を申しますれば、日本の統一の業は誰がしたか、神武天皇が日本を統一遊ばされたのである。又た統一された所の日本を、誰が平定されたか、景行天皇が平定されたのである。即ち景行天皇の皇子の日本武尊が御東征遊ばされて、始めて日本が立派に平定したのであります。即ち天皇でなければ、天皇の血を直接お受けになつた皇子であります。帝國肇造、全國統一の業は、天皇及び皇族の力に頼らざるものはないのであります。之は單に武ばかりではない。文事に於ても亦た其通りであります。大化、大寶の改革も、畢竟するに天智天皇を中心として出来たのである。天智天皇を除外しては、日本の大改革である所の大化、大寶の歴史を語ることは出来ないであります。大化は天智天皇が中大兄の皇子として孝徳天皇を扶けられ、大寶は天智天皇の御遺業を、文武天皇が大成せられたのであります。更に建武中興になりまして、之は残念なことでありますが、南北朝に分れまし

た。然しながら建武中興が成立つた。世の中では楠正成、北畠親房、新田義貞、菊池武重等凡そ南朝の忠臣に就て、皆多大の同情を表して居ります。然しながら建武中興は決して楠正成の力ばかりではありませぬ、新田義貞の力ばかりではありませぬ、北畠親房若くは藤原藤房の力ばかりではありませぬ。それよりも以上に大きな力があります。それは誰であるかといふと、後醍醐天皇であります。後醍醐天皇はあれ程英明な御方でありますけれども、不幸にして其の聖徳が全く世の中に現はれて居りませぬ。兎角世の中では事の成敗を以て論じ、遇然に仕合せの良かつた人は大變偉いやうになり、遇然に不仕合せになつたものは大變悪く言はれて居ります。恐れながら其例を此の後醍醐天皇にもつて參ります。私の考も、後醍醐天皇の御政治向きに就ては、悉く間違が無いとは申しませぬ。然しながら後醍醐天皇に、若し御缺點がありとすれば、餘りに後醍醐天皇が聰明にあらせられて、餘りに親らを御用ひ遊ばされた爲めである。若し後醍醐天皇が當時

の名臣をお用ひになることが、明治天皇の西郷、木戸、大久保、伊藤、山縣、大隈、其他の者をお用ひになつたやうな程度にお用ひになつたならば、建武中興の業は終りを全うしたかも知れないと思ふのであります。然しながら何れにしても正成の方から、天皇に申し上げたのではない。天皇の方から宜しく頼むと言つて、積極的に正成にお話になり、正成が感激して命を受けたのである。さうして建武中興の運動の源は後醍醐天皇であつて、正成等は天皇の御志を遵奉したに過ぎないのであります。名和長年にして其通りで、隱岐からお還りになつた時に、頼むといふお言葉があつて、長年が感激して命を受たのであります。私は常に後醍醐天皇の事に就て研究したいと思つて居ります。貴下方は妙心寺にお泊りになつて居るさうであります。妙心寺のそばの大徳寺といふ所にお出でになると、後醍醐天皇が大燈國師にお興へになつた下知があります。實に御言葉と言ひ、御文と言ひ、何とも申し上げやうのない程の結構なものであります。妙心寺の開祖の關山和尚と

云ふ人は大燈國師の門下であり、後醍醐天皇も亦大燈國師に參禪遊ばされて居つたのであるから、畏れ多い話であるが、妙心寺の開祖と後醍醐天皇とは同門でいらつしやるのであります。お暇があつたら大徳寺に行つて、後醍醐天皇の御宸翰をお拜しになつたならば、私が申上げた如く、成程斯の如き結構なものをお書き遊ばしたのであるから、實に之は一代の英主でお出でになつたと云ふことが、合點が行くであらうと思ひます。若しお暇があつたら、御覽になることを希望しておきます。

それから承久の亂に付ては、之はなか／＼立入つた問題でありまして、承久の亂は皇室の御失敗の歴史である。皇室の御歴史中一番の御失敗が、承久の亂であります。然しながら成敗は第二番として、承久の亂の因は、後鳥羽上皇がお始めになつたものである。何れにしても、日本の國民的大運動、歴史上の大事件と云ふものは、皇室が本となつて居ると云ふことは間違ありませぬ。即ち此の意味に於て我

が王政維新の如きも、全く其通りであります。

維新の歴史を説く人が、或は西郷隆盛、或は橋本左内、或は吉田松陰、或は薩摩、或は長州、或は土州、或は水戸、いろいろの地方、或はいろいろの人物に就いて申しますが、要するに王政維新の根本的主動の御方は、第一に光格天皇、第二に孝明天皇、第三に吾々が仰ぐところの明治天皇であります。此御三方を貴下方が御研究にならなければ、決して維新の歴史が解る筈はないのであります。即ち此お三方の天皇が、幕府の腐つた制度を打破する途を教へて下さつたのであります。孝明天皇の御歴史を讀む毎に、私は如何に孝明天皇が英明でおはしましたかといふことに就て、感涙の流れるのを覚えるのであります。孝明天皇は未だ寶算四十歳にもわたらせられずして、維新の目的を貫徹するに至らず、崩御あらせられましたけれども、維新の大業は孝明天皇の時に殆ど成つたのであります。然るに今日までの歴史家は、皇室が如何に國民的運動の中心であり、率先者であるかといふことを

忘れて、肝心の源を忘れて、肝心の中心を忘れて、まるで外の事のみ研究して居るといふに至つては、私は甚だ遺憾であると申さなければならぬのであります。

四 皇室と國民

第三には、反當局者はありませんが、反皇室者はいないのであります。當局の政府に背いた者はありませんけれども、皇室に對して背いた者は無いのであります。水戸義公の如きは『叛臣傳』と云ふやうなものを『大日本史』に書いてありますが、之は私は遺憾ながら水戸義公の千慮の一失であると思ふ。支那の歴史には『叛臣傳』があります。之は有るべき筈であります。然しながら日本の歴史には、叛臣と云ふやうな者はないのであります。固より當時の政府に反して弓を引いた者は、政府の後には陛下がお出でになるから、叛臣であると云ふことであれば、今日の民政黨は叛臣である。又た民政黨内閣の時の政友會も叛臣であると云ふことになりません。日本は何時も半數だけは謀叛人と云ふことになつて、政府の更迭のある毎に謀叛人が出來て居つたら、日本は恰も謀叛人ばかりであつて、一人も忠臣は無いといふやうな結論になるのであります。支那の歴史の作り方を日本に持つて來て、さうして殊更に謀叛人でない者を謀叛人にして、其中に加へたといふことは、洵に御苦勞千萬な話であると思ひます。私は此點に就て義公を非難するのではない。義公の命を受けて編輯した人々が、聊か千慮の一失であると思ふのであります。

然しお前さんはさう云ふけれども、木曾義仲はどうであるか、斯う申す人があります。一體木曾義仲を謀叛人などと云ふのは、餘りに義仲を買被つたもので、木曾義仲と云ふ人は、決して私は木曾の悪口を言ふのではありませぬが、其の當時の木曾は、どうも開化とは言へないと思ひます。其の木曾の山の中から出た人が、京都へ來て、京都でやつた仕事に對して、それを謀叛人などといふことは、洵に義

仲を買被つた話であります。何等教育も無い、唯元氣のあること、生れつき伶俐であつたと云ふだけで、木曾の山猿同様の人が京都にやつて来て、物唾ひの種子を蒔いたと云ふだけで、之は唾ふ資格はあると思ひます。然しながら之を叛臣などと云ふことは、どうも之は買被りである。義仲は洵に有がた迷惑であらうと思ひます。

又た平将門と云ふ者があります。之は洵に念の這入つた謀叛人であります。所が之も私は決して将門の爲めに頼まれて辯護士になつた譯ではありませぬが、然しながら将門に就ては多少研究したことがあります。将門の事に就て最も正しき所の根本材料を見たのでありますが、それは愛知縣の寶生院即ち眞福寺にある所の『将門記』であります。此の『将門記』は今日國寶になつて居りまして、之は将門の死んだ年に出来た本であります。将門の死んだのが天慶三年の二月十四日であつて、此の『将門記』は其の六月に出来た本で、新聞紙も同様のものであります。或は小さい

點に於ては間違があるかも知れませぬけれども、大體に於ては其の當時の記録であつて、信を措くに足るものであります。此の『将門記』に就て見れば、餘程事情が解ります。将門は本來左程悪黨ではない。唯だ同族の間に財産上の問題があつて互ひに喧嘩をし、又た婦人の關係で其の仲間と喧嘩をしたのであります。将門は若い時に伯父さん方から財産を預つて居る、さうして将門が大きくなつてから、それを返せ、返さぬといふやうな事になつて、財産上の喧嘩、其次には将門と親類の若い者との間に婦人を争奪し合つた。即ち婦人の争奪戦である。さういふことから段々内輪喧嘩が出来て、将門にも味方があり、又た反對者にもそれ／＼味方が出来て、喧嘩の末に、将門が謀叛をしたといふことを、京都の朝廷に、訴へたのである。

今日であれば、政黨の争ひのひどい所は、あの黨派は不敬罪をかましたとか、どの黨派は皇室に對して洵に濟まない言行をしたとか云ふやうなことで、互ひに中傷

するのでありますが、將門の時代に於ても、反對黨の方では喧嘩をしても勝てず、争つても勝てないから、寧ろ之は謀叛といふことにして、將門は實に朝廷に對して不埒なことをして居るといふことを京都に讒訴したのであります。若し其時に幸ひに郵便があり、汽車があり、電信があり、飛行機があり、ラヂオがあつたらば、何の心配も無いことである。然しながら其の當時は關東から京都に來るのに、は、なか／＼の日數を要したので、先の人が朝廷へさういふことを申上げ、それを將門が聞いて辯解しやうと思ふ時には、京都の方では既に詔が出て居る。今更ら辯解しても仕方がない、毒を食はば皿までと云ふ事になつて、もうやぶれかぶれである。やれるだけやるより外仕方がないといふことになつたのである。洵に其通りで、勝てば官軍敗れば賊軍、一つ反旗を翻してやらうといふことになつたのであります。尊氏は反旗を翻して北朝の天子様を戴いたが、其時關東には北朝の天子様として戴くやうな持合せがなかつたのであります。而して將門は自

分が桓武天皇の御血筋を受けて居るものであるから、自分が自ら進んでやつても差支へないではないか、斯ういふことになつたのであります。將門が朝廷に向つて謀叛したのではないことは、將門が朝廷に申上げた文書によつて非常に明らかになつて居ります。之を此處で讀みますと非常に長くなりますから讀みませぬが、實に其の申譯の文を讀んで見ると條至り理盡して居ります。成程將門は可哀さうである。茲まで押詰められ、ば致し方がなかつたらうといつて、將門に對して同情するやうなことがあるのであります。然し將門のやり方は一から十まで、私は辯護するものではありません。將門は段々やつて居る間に面白くなつたら、少しく氣が變になつて來たのである。若し私が將門を裁判するのであつたら、私は之は刑務所に入れるべきものではない、松澤病院か、外の氣狂ひ病院に入れる者と思ひます。

今申上げました通り、日本の歴史には反當局者はある。時としては言論の盛に行

はれる時には言論でやる。言論が行はれない時には腕力でやるといふことはある。然しながら一天萬乗の君に對して、己の方から進んで弓を引いた者は決して無いのであります。北條氏といふものは、日本では最も不臣の極と言はれて居るけれども、後鳥羽上皇の追手の軍が走つた時に、北條泰時が其父義時に向つて「敵が來たらどうするか」と言つた時に「敵が來たら打亡ぼせ」若しお上が親らお出でになつたらどうするか「其時には馬より下りて兜を脱ぎお上の思召に任せよ」斯ういふことを泰時に命令した位であります。決して日本では臣民が皇室に對して、謀叛をするなどといふことは、今後は神ならぬ身の私の何とも申上げませぬが、過去に於ては絶対に無いといふことを茲に斷言して憚からぬのであります。

五 外國の勢力と日本の歴史

第四には、日本の歴史には外國から征服されたことが無い。日本から進んで朝鮮を取つたことはある、又た朝鮮に於ける日本の勢力が唐の勢力の爲めに驅逐されたこともある。然しながらそれは恰も明治天皇の時代に於て日本が遼東半島を取り、三國干渉によつて又た之を返付したのも同様であつて、之は決して日本が領土を侵されたといふ例とはならぬのであります。即ち日本は昔から一石一木、一握りの土も、未だ曾つて外國より奪はれたことはないものであります。さうして一朝日本に於て事ある秋には、上下一致して、即ち北條氏の時代に承久の亂のあつた後で、京都と鎌倉幕府とは始終そりが合はなかつたけれども、文永、弘安の役に於ては、京都も無く鎌倉も無く、日本全國が一致して敵に當つたのであります。香川景樹の歌と思ひますが、

ひとかたに靡きそろひて花薄風吹くときを亂れさりける
 と云ふ歌があります。花薄と云ふものは平生は右に倒れ左に倒れ、前に靡き後に靡いて居りますけれども、一度風が吹くときには一方にちやんと向ふと云ふこ

とを歌つたものと思ひますが、全く其通りであつて、勅語にも仰せられてあります。「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」と、此點は文永、弘安の役のみならず、維新の際に於ても然り、殊に二十七八年の役、三十七八年の役が最も之を適切に證明して居るのでありまして、皆様方は既に之を實驗して居られることであります。

六 日本國民の特色

第五は、日本の歴史は淵があつて底が無い。實に不可思議な歴史であります。日本の歴史は何でも呑んでしまふ。然し乍ら未だ曾つて吐出したことがないのであります。排斥などと云ふことは、外の國に於ては非常にやつて居る。現に太平洋を隔てたる隣國などでも、有色人種を盛に排斥して居ります。之は其國の歴史でありませうから、外の國のことまで私は心配する譯にいかぬのであります。幸ひに日本は何處までも包みこむといふ包容の歴史であつて、未だ曾つて他を排斥す

るといふ歴史は無いのであります。何故なれば、日本に來る總てのものは悉く之を消化してしまふか。されば悉く日本化してしまふからであります。

即ち日本の『姓氏錄』と云ふものを御覽になれば、皇別、神別、蕃別と云つて、三種の區別を擧げてあります。皇別は申上げるまでもないこと、神別は本來日本に居つた人々、蕃別は支那朝鮮等の外國から來た人々である。即ち我が皇室に隨從して居る所の者も、本來日本に居つた所の者も、又た新たに外國から來た者も、悉く日本國民として、此三つのものが日本國民として國を形造つて居るのであります。御同様の中には、少くとも其の三者の血が混つて居るのである。然し吾々共は悉く日本國民である。何俺は臺灣人である、俺は樺太の者である、俺は朝鮮人であるなどと云つて、自ら僻み、若くはそれ等の者を僻ませるやうなことがあるべき筈のものではないのである。若し昭和の御代に於てさういふことがありましたならば、吾々の先祖は胃の腑が強かつたが、吾等は實に胃病に罹つたものと言

はねばならぬ。それ程消化が出来ないで、どうして大國民たることが出来ますか。吾々は一切のものを消化し盡して、之を悉く日本化してしまはねばならぬ。一切のものを消化し盡して、悉く之を日本民族化しなければならぬ。それが出来ない位ならば、吾々は吾々の先祖に對して申譯がないのであります。皆様も御承知の通り『日本書紀』の祈念祭の祝詞にも、

辭別 伊勢爾坐天照太神能 太前爾白久。 皇太御神能 見霽志坐四方國者 天能
 壁立極。 國能退立限。 青雲能 靄極。 白雲能 墜坐向伏限。 青海原者棹柁不干。
 舟艦能 至留極。 大海原爾舟滿都都氣氏。 自陸徑道者荷緒縛堅氏。 磐根木根
 履佐久彌氏。 馬爪至留限。 長道無間久立都都氣氏。 狹國者廣久。 峻國者
 平久。 遠國者。 八十綱打挂氏 引寄如事。 皇太御神能 寄奉波。 荷前者。 皇太御神
 能 太前爾。 如横山打積置氏。 殘乎波平。 聞看。 又皇御孫命御世乎。 手長御世
 登堅磐爾常盤爾齋比奉。 茂御世爾幸閑奉故。 皇吾陸神漏伎神漏彌命登。 宇事

物頸根衝拔氏。 皇御孫命能 宇豆乃幣帛乎。 禰辭竟奉久登宣。

とあります。所謂青い雲の棚引き、白い雲の群一切のものを八十綱かけて引寄せるのである。排斥するのではない、包容するのである。包容するばかりでなく、同化するのである。之が日本の歴史の特色であります。國內の到る所に大きな池があるのは、皆歸化支那人、歸化朝鮮人の掘つたものであります。土中を掘つていろいろの埴輪人形なんか出て来るのは、之又た植民地の人々が作つたものであります。法隆寺の壁畫、之は百濟から來た人が描いたものであります。然し日本ほんの文明といふものは、日本固有のものはない、皆外國みなぐわいこくのものであるなどといふことは餘程お目出度い人ひとであります。自分の畑はたけに出來たものより食べられないといふことであれば、吾々は一生大根や菜葉より食ふことが出來ない。吾々は漁師でないけれども魚も食へる、獵人でないけれども鳥も食へる。何ぞ必ずしも吾々が醬油屋となつて然る後醬油を食し、魚屋となつて然る後魚を食し、牛肉屋とな

つて然る後牛肉を食べなければならぬといふ理あらんやで、自分が醫者にならなければ、病人たることが出来ないといふことになるのであります。斯の如く日本では佛敎が來れば、それを日本化してしまふ。儒敎が一度やつて來れば、日本の國體に相容れない點もありませんが、日本では相容れない點は残して、役に立つ所だけ用ひる。今日に於ては基督敎も亦然りであります。總ての外國のものを採つて、而してそれに日本の印章を押して之を日本化し、更に進んで其の模範を世界に示して、斯ういふことも出来る、斯ういふことも行はれる、斯ういふ風にすればよいといふことを示す。之が日本の歴史の傳統的精神であります。

七 日本史の根本思想

第六は、日本の歴史と外國の歴史と、根本的に違つた所がもう一つあります。外國と申しましても總ての外國の話をして居ると長くなりますから、假に英國の

歴史を一つ例として申しますと、英國の歴史は先づ權利の觀念を以て一貫して居る、所謂英語のライトといふ觀念を以て一貫して居るのである。英國では始めに大名が寄つて王様を脅迫して、王様から權利を取つたのである。第二にはチユートン民族が段々起りまして、さうして王様と争ひ、終に人民の權利を伸張したのである。之がスチュアルト朝に於ける歴史でありまして、其主なるものは彼のクロムエルの革命であります。其次には工業が段々發達して、チユートン民族が愈々勢力を得て權利を取つたのである。之が即ち十九世紀の始から終に至る議會改革の歴史であります。

要するに英國の歴史は、與へる歴史でなくて、取る歴史である。唯取るばかりではない、腕力で取る歴史である、苦めて取る歴史である、脅迫して取る歴史である。固より權利の裏には、義務があります。英國人は決して權利の思想ばかり持つて居るものではない、義務の思想も十分に持つて居りますけれども、足を踏

出す所は義務の方から踏出すのではない、権利の方から踏出すのである。之が英國の歴史であります。之は私が一々申上げるまでもなく皆様は十分御承知であらうと思ひます。

所が日本の歴史は又た其逆に行つて居るのである。日本の歴史は義務の觀念を以て一貫して居るのである。取るのではない、與へるのである。奪ふのではない、授けるのである。英國ではやりたくないが、遮二無二やれと言つて喉を押へ付けられるので、命には代へられないから仕方なくやるのである。チャールス一世の如きは、人民から縛られて斷頭臺上の露と消えたのである。然るに畏れながら日本の歴史はお上から下されたのである。吾々は難有く頂戴したのである。吾々の方からは何か捧げたい、お上の方からは何か授けたいといふことを以て、之が一貫して居るのである。日本國民の忠義が維新に始まつたなどといふのは、餘りに日本の歴史を無視した言であつて、其の適證は『萬葉』の歌にもある。『日本書紀』にも

ある。忠義といふことは決して今日に始まつたものではない、吾々の祖先の祖先の其又た祖先から持傳へられたものである。吾々は何故に忠義をせねばならぬかなどといふことを考へる暇は無いのである。忠義といふことは吾々先祖代々、先天的に受繼いで居るのである。事新らしく吾々は忠義をしなければならぬといふことを、箇條を立て、議論しなければならぬやうになつたならば、私は先づ世は未世になつたと言つてもよからうと思ふのであります。

御承知の通りにお上は、未だ曾て西洋諸國、支那の如く人民を私有財産となされさたことはない。日本に於ては國民はお上の大御寶である。大切なものであつて、皇祖皇宗からお受繼になり、且長くお傳へになるべきものである。又た吾々は先祖が申した通りに「海行かば水づく屍、山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死ぬめ長閑には死なじ」之が祖先以來今日に至るまで、我が大和民族の血管を流れて居る所の精神である。此の義務の觀念が明治聖代に至つて、最も高潮に達したのであ

つて、明治天皇は吾々に向つて、天皇の御一身を以て我が國民の爲めにといふ思召によつて、御生活を遊ばされたのである。所謂民に報ずるといふのが明治天皇の大御心であるし、又た吾々共は君に報ゆるといふのが吾々の心であつて、互ひに遣るとか取るとかいふ様な事ではなくして、お上の方からは民の爲めにお授け下され、吾々は君の爲めに捧げ、君の爲めに盡す義務をもつて居るのである。お上の方では之を天職と申上げる。吾々に於ては之を臣節と申すのである。君には天職がおはし、吾々には臣節がある。日本の歴史は義務の觀念といふことで、始終一貫して居るのである。頼山陽が「漢の文帝といふ仁君が支那にもあつたが、然しながら之は支那に於ては珍らしい仁君であらうが、日本に於ては決して珍らしくない、日本の天子は悉くとは思はれないかも知れないが、概ね漢の文帝の如き仁君でおはしたのである。」と、申して居りますが、實に其通りであります。後奈良天皇の御時に於ては、皇居の土塀が壞れて、三條大橋からお上の在ます所

を拜されたといふやうな時代である。其の皇室式微の極におはした所の後奈良天皇の時代に於ても、天皇は當時疫癘が國中に流行した時に、

今茲天下大万疫民多跣放死亡。朕爲民父母。德不能覆。甚自痛焉。竊寫一般若心經一卷於金字。使義堯僧正。供養之。庶幾瘳爲疾病之妙藥一矣。

于時天文九年六月十七日

と仰せられて、天皇は外に遊ばされる方法もありませぬから、此の洵に痛はしい人民の疫癘を拂ふ爲めに、茲に自分は「般若心經」を寫して、どうか之によつて民の病がぬけるやうにありたいといふことをお書きになつて、諸方にお配りになつたのであります。之も國寶として今日遺つて居りますから、機會がありましたら御覽になることを希望致します。斯の如くであつて、要するに上は與へ下は捧げるといふことで、日本の歴史は一貫して居るのであります。

以上申上げました六箇條は、少くとも日本の歴史の大綱目である。此の六箇條を皆

様が頭の中に入れて、然る後に日本のことを御研究になれば、日本の歴史は最も分り易いと思ひます。此の大綱目を御研究にならずして、詰らない所に頭を突込んで居つては、とても分るものではないのであります。此の六箇條を頭の中に入れて、日本の歴史をお読みになり、殊に維新以來の歴史をお読みになり、明治の歴史をお読みになり、更に昭和の御代に於て、皆様方が國家に盡し、我が叡聖文武の天皇陛下の人民として十分御活動にならんとする時に於ては、此點に就て深く御研究になつたならば、必ず諸君は今後世に處し事に當つて決して誤まることはないと思はれます。最初に申しました通り時間が甚だ少い爲めに申上げることが大變荒つぱくありましたけれども、私の申上げた所は多分皆様方が御諒解下さつたことゝ存じますから、私の講演は是で終りを告げます。

(昭和三年十一月十七日、京都に於ける全國聯合青年會にて)

國史研究に就ての一一二の考察

一 緒 言

諸君、只今迄私及び私の妻に對しまして、過分なるお言葉を戴きまして、何共御禮の申上げやうもありませぬ。殊に先程我が同業者の最も有力なる進藤君(信義)より色々のお話があり、中には少し話が深入りして、地を掘つて身を埋めて見たいやうな心地がしたのであります。又た高橋知事閣下(守雄)より、恐らくは私が知事と御同郷の關係があつたが爲めでもありませんが、誠に御懇篤なる御紹介をして戴いて、所謂慚汗背を濡ほし大に恐縮して居る次第で御座います。知事閣下は私の話は滅多に聽かれなると云ふやうな事を云はれましたが、決して私は高く止まつて居る譯ではありません。實際演説する事は非常に困るので

ありまして、出來得るならば演説は一切せないと云ふ方針で居りまするが、然しどうも、此方からお断りすれば、却つて向うから猶更ら強ひられると云ふやうな事でありまして、其の爲め御當地からも度々色々の御照會があつたがお断りした。正直の處今度もお断りしたのでありましたが、折角蘇峰會まで作つて頂いて居るのに、大きな顔をしてお断りでもしたら、皆様から見限られると思ひまして、さう云ふ私に弱味があつたものですから、致方なく出て來たやうな次第で、決して悦んで出て來たのではありませぬ。然し折角出て來たからには、何かお爲めになるお話をしたいと思ひまするが、今夕は蘇峰會の支部でもあるし、講演會でもあると云ふやうな譯で、何方の方を餘計に話して宜いか、實は私も困つて居るのであります。そこで『國史研究に就ての一二の考察』と云ふやうな事に付て、私が『近世日本國民史』を書きます心持、又た其の心持が如何云ふ譯で出來たかと云ふ事に就て、私の感じた一二を申上げて見たいと思ふのであります。

ニ 争闘時代の現時の世相

今日の世界の状態を見ますれば、總てのことが「争ひ」と云ふ事が原則になつて居るやうに見受けられるのであります。例へば「労働争議」と云ふやうな事もあります。又た「政黨の争ひ」と云ふやうな事もあります。現に今日、東京の貴族院及び衆議院に於ても、未だ開會二日目でありまするが、何かしら争うて居るのであります。既に開會第一日から随分盛んに争ひが始まつて居るやうであります。御承知の通り東京には電車のストライキと云ふやうなものもあります。又た御當地の事は詳しく知りませぬが、御當地にも何かさういふやうなお話も伺つて居るのであります。私はさういふ事が善いとか悪いとか云ふ事を、茲に申上げるのではありません。然しながら一體に人間は争はなければならぬものであるか、戦はねばならぬものであるか、戦ひ若くは争ふと云ふ事が、人間の原則であるかと云

ふやうな事に就ては、我々は此際篤と考へる必要があると思ふのであります。若し又た争ふと云ふ事が人間の状態であれば、其の状態は其儘にして置くべきものであるか、若くはさう云ふ状態を改良して、争はないやうな方法を造るのが宜いのか、其等の事に就ても我々は篤と考へなければならぬと思ふのであります。今最近の出来事に就て申上げますと、世界の大戦以來既に十年餘を経過して居るのであります。此の世界の大戦が十年餘を経過して、世界は如何云ふ風に歩いて居るか、世界の大きな車が、如何いふ風に動いて居るかと云ふに、勿論世界統一と云ふ方に歩いて居る事は間違ひはないのであります。即ち其の爲めに國際聯盟と云ふものも出来、其の爲めに軍縮と云ふやうなものも出来、又た其の爲めに凡有る問題、凡有る事件に就いて、世界列國に所謂萬國會議などと云ふものも行はれつゝあるのであります。昨年京都に行はれました太平洋會議、東京に行はれました工業會議、又た本年大阪に行はれました醫學者の大會なども、皆な其等

の意味であらうと思ふのであります。世界が此の調子で行けば凡てが非常に親しくなり仲好くなつて、萬事が巧く行くやうに見えて居るのであります。然るに今其の皮を剥いで見ますと、其れがさうでない事が非常にあるのであります。是迄世界を歩く時に旅券などといふものは必要がなかつた。只だ露國に這入る時のみ旅券が必要であつたのである。昔私共が亞米利加邊りを歩いた時には、亞米利加程自由な國はなかつた。眼を瞑つても歩けるやうな處であつた。然るに今日は如何であるか、何處へ行つても關所ばかりで、安宅の關が幾つあるか知れず、容易にどうも急には這入れないのであります。近い例を申しますれば、今我が紡績業者の最も迷惑を感じて居る印度は如何であるか、印度杯は遅れ馳せと云つて宜いか、或は最も時を得て居ると云つて宜いか、其れは私が茲に何れとも申上げやうがないのであります。御承知の通りに日本から這入つて行く品物に非常な重税をかけたのであります。日本でも大變に驚

色々々と運動もし、手段も盡され、中には反對の理由杯を書いて、印度の會議の席上で配られた方もあつた程、盛んに運動したのであります。そして英國政府に其事を訴へますと、英國政府が云ふには、關稅の自治權と云ふものは、既に印度に渡してしまつたから致方がない、先づ印度政府と直接談判なさるが宜い。斯う云ふ事になつて、到頭それは致方がなくなつてしまつたのであります。又た支那に於てはどうか、御承知の通り今度支那との通商條約の改訂が立派に出來たと云つて喜んで居るけれども、之れは支那の側から喜ぶだけであつて、日本の側から喜ぶべき事であるか否かと云ふ事は別問題である。關稅自主權などと云ふものは、詰り日本の品物が支那に這入つて行くのを、徐々這入らないやうな方便を作ると云ふに外ならぬ事であらうと、私は思ふのであります。さうして見れば、世界は大戦後非常に窮屈になり、面倒になり、五月蠅くなり、却々思ふやうには行かなくなつた。戦さをせない前の方が、却つて樂である。一

千萬人の人を殺し、一千万人の人を傷つけ、二千萬の生靈と云ふものを殆んど宇宙からして、一時に吹飛ばしてしまつたやうな事をしつゝ、其の結果は何かと云へば、世界が全く窮屈になつたと云ふ事に外ならぬのである。色々考へて見れば、世界の何方に向つて歩いて行くにも旅券が必要である。世界は段々圓くなつて行き、樂になつて行くやうだが、審かに之れを見ると、世界は段々窮屈になり、四角になり、お互ひが小さくなつて行くのではないかと思ふのであります。例へば英帝國內に於ける自由貿易に致しましても、英帝國內だけで自由貿易をやると云ふ事だけで、英帝國以外に向つては、不自由貿易をやると云ふに外ならぬ。則ち英帝國內に垣を造つて、外の國に對して區別をして行くと云ふのではないかと思ふのであります。其れで寧ろ是迄の方が樂ではないかと思ふのであります。左様云ふ譯であつて、世界は如何云ふ風に歩いて行くのか、私共には一寸も譯が判らず、世の中の事は却々單簡に行かないのであります。所謂此方の方から

觀れば、山のやうに見える、彼方の方から觀れば、岡のやうに見えると云ふやうな事であつて、後から見た姿、前から見た姿、横から見た姿、斜に見た姿、其の見所次第に依つて變るものであります。私は日本が今後如何なるであらうか、如何すれば宜いであらうかと云ふ事に就て、皆様方と共に大いに考へて見たいのであります。そして何時も考へて居る時に、其の結果と云ふものが、何處に落著るかと云へば、自分の國と云ふものは、如何云ふものであるかと云ふことに立返らざるを得ないのであります。即ち我々が千秋萬古、色々の世界の運命を稽へ、又た其の世界に立つ處の自分の國の運命を稽へて行く時に、其の結果が如何云ふ風になるかと云へば、自分の國の歴史と云ふものに、如何しても稽へが戻つて來なくてはならないやうになつて居ると云ふ事でありませう。

三 ソビエト聯邦の現状如何

今日第三インターナショナルなどと云ふ處の人は、國境と云ふものは無い、又た民族と云ふものもない、所謂労働階級と云ふものは世界の労働者の階級であつて、其れに依つてやると云ふ事を云つて居る。然しながら事實は未だ曾つてさう云ふ事はないのである。今日世界に於て、最もナショナルイズムの所謂國民主義の徹底的に行はれて居る處は、第三インターナショナルの本家本元、即ち露西亞である。日本から態々露西亞を慕つて、露西亞へ精神的に歸化した人々が、露西亞に行つて露西亞で如何云ふ待遇を受けて居るか云ふ事をお考へになると、其れが能く事實を物語つて居るのであります。此の話を詳しく申すと云ふ事は、私は茲に憚りまするが、彼等の中の或人の如き——人の名を指して申しても宜しうございませう、片山潜などと云ふやうな人は、向うでは先づお客扱をされて居ると云うて差支ないのでありませうが、他の日本から行つた處の人々などは、酷い目に逢つて、打たれたり、叩かれたり、蹴つたり、殴られたりして居るのであつて、其

等の事情と云ふものは、能く日本にも判つて居るのでありますが、何を苦んでさう云ふ人々が、露西亞の赤化主義の手先になつて居るのか、私には判らないのであります。

露西亞と云ふ國が所謂のツアールの政治であり、レニンの政治であらうが、其れは露西亞の事で、私共には何等頓著はない、御勝手である。然しながらレニンの政治は世界主義である、ツアールの政治は所謂の専制主義であると云ふやうに考へては、其れは飛んだ間違である。今日の所謂のソビエト露西亞のやる仕事を見ると、自分の國に於てすることは、私ども敢て評論する限りではないが、然しながら他所の國に於てする仕事と云ふものは、實にどうも亂暴な事をやつて居る。詰り一種の帝國主義である。打破帝國主義などと云ふ言葉を使つて居るけれども、本當は矢張り帝國主義をやつて居るのであります。即ち労働帝國主義とも云つて宜いのであります。英國の労働黨の政府は、御承知の通り今日では、其等

の事情を能く知つて居り、又大に鑑みた處があると見えまして、露西亞の労働黨政府とは全く手を切つて居る。國としては交際して居るけれども、所謂の労働階級としての交際は殆んどやつて居らない。無論中にはやつて居る人もある。其れは英國労働黨の内の極左の人々であつて、大體に黨派は全く別になつて居る。之れは彼等が能く苦き經驗を舐めた結果であらうと思ふのであります。

四 民族自決主義

其れで今日世界が如何いふ風に動いて行くかと云へば、階級争闘などと云ふことをやつて居り、階級争闘者の人々は、所謂の労働者は労働者と相合してやらなければならぬと云ふやうな事を云つて居る。其れも一應は本當かも知れない。然しながら終局的處何處に戻つて來るかと云へば、ナシヨナリズムに戻つて來るのであります。露西亞人は矢張り露西亞人、獨逸人は矢張り獨逸人に戻つて來るので

あります。御承知の通り、獨逸の社會黨が世界戦争の時には、九分と申す譯には、行かないけれども、七分八分迄は、戦ひにも出たし、又た普通に、若くは普通以上に、獨逸人としての働きをして居るのであります。平生は労働者階級などと云つて、世界の労働者は互ひに手を握ると云ふやうな事を云つて居るが、萬一と云ふ時になつては、獨逸人は何處迄も獨逸人、佛蘭西人は何處迄も佛蘭西人、英國人はどこ迄も英國人。中には非戦論を唱へた人もあるけれど、其れは極めて少數である。幾許非戦論を唱へたと云つても、其の人が眞逆英國人であつて——例へばマクドナルドのやうな人は非戦論者であるが、如何に非戦論者であつても、獨逸には決して味方をしなかつたのであります。さう云ふ譯でありますから、世界の趨勢と云ふものは、今後如何なつて行くか、私には判らないけれども、平和になるにしても、戦ひをやるにしても、何れにしても所謂ユニットと云ふものを本位として行く、矢張り國家國民を本位として行くものであると、我々は斷定して考

へなければならぬのではないかと思ふ。經濟的に考へても、出來得る限りに於て自給自足、又た政治的に於ても、出來得る限りは自治。實際之れでなくてはならないのではないかと思ふのであります。其れで語を換へて云へば、個人として我々の頼む國家は我國、我國を頼む外はないのではないかと思ふのであります。國を抜け、國を棄て、國を度外視して、さうして人類の幸福を計るとか、若くは世界の進歩を計るとか云ふ事は、今日に於ては、全く夢ではないかと思ふのであります。ナシヨナリズムと云ふものは、決して世界平和の敵ではなくして、世界を平和に導く爲めには、矢張りナシヨナリズム、即ち、國民的精神と云ふものを土臺にして行くより外に道はないと思ふのであります。其れが出來なければ、他の強國に吞まれて劣等人種として、劣等民族としての取扱を受ける外はないのではあるまいかと思ひます。其等の事から考へて見ますと、世界の今後の趨勢に就ては、今申すやうな二様

の觀察があつて、何づれの方面に世界が動くにせよ、一番安全なことは國を持つて動くこと云ふ事が一番大切な事であつて、今後戦が盛んに行はれると思ふ人でも、今後平和が盛んに行はれると思ふ人でも、今後は修羅の世界と見ても、今後は黄金の世界と觀ても、どちらでも第一歩は即ち國と云ふものを我々のものにして、國に據つて世界の平和を進め、國を持つて世界の平和を援けると云ふ、其れが我國の所謂の平和を援けると云ふことにならなくてはならぬと思ふのであります。それで共産黨とか、何黨とかの人々が國を呪ふなどと云ふやうな事は、それは根本的に考へが間違つて居るのであつて、國を呪ふと云ふことは自分を呪ふと云ふ事になるのではないかと思ふ。労働者でも日本の労働者は、矢張り日本の労働者であります。今日世界の争ひを日本の力で止めると云ふ事が出来るや否やと云ふことは別問題として、尠くとも日本の國だけは争ひを止め、日本の國だけは確つかり持つて居ると云ふことにせなくてはならないと思ふ。さうするには私はどう

しても皇室中心主義に依つてやるより外はないと云ふ結論に達するのである。

五 美しき日本の歴史

私の皇室中心主義と云ふものは、決して初めから『古事記』や『日本書紀』を讀んで考へた皇室中心主義ではない。私は『古事記』などを最初に讀んだ人間でなく、最後に讀んだ人間である。私の事を此處で云ふのは如何はしいとでありませるが、私の一番先きに讀んだ歴史と云へば、矢張り亞米利加の歴史とか、英國の歴史であつた。私の學校と云ふものは、亞米利加の宣教師が教へた同志社であつたのである。今日の同志社は立派な日本の同志社であります。私共の時の同志社は、天長節に休まず、祭日は休みではなかつた。唯だ亞米利加人の都合の宜い日に休んだもので、亞米利加の宣教師が避暑をすれば長く休んだものであつた。同志社の其時の夏休みと云ふものは、六月の初めから九月の中旬迄、又た土

曜と日曜と二日休みがあり、なか／＼休みが多かつたものである。さう云ふ譯で、私共は別に初めから『日本書紀』など教はつて來た人間ではありませぬ。子供の時は寧ろ世界主義の教育を非常に受けて來たものであります。

然しながら色々自分で考へても見、又た色々の研究もして見て、日本と云ふ國は如何云ふ國であるか、日本を維持するには、如何云ふ風にして維持して行くか。日本の威信と云ふものは、如何云ふ意味に於て保つて行くべきかと云ふ事を研究し、及ばずながら支那の歴史も一通り研究し、世界の歴史も若干は研究し、特に自分の國の歴史を努めて研究し、成程日本國と云ふ姿、日本國の本色と云ふものは此處である、此處を把へて行けば、日本が強くなるか、弱くなるかは知らないけれども、尠くとも日本國として世界に於ける存在と云ふものを保つことは出來やう。斯ふ云ふ風に考へまして引續き色々の研究して來たのであります。私が日本の歴史に就て考へた處の第一のものは、如何も日本は恵まれて居らな

い國である。何んと云つても此の日本は——昔の人は氣候溫和であり、土地が豊穰であつて、五穀も出來ると云ふやうな事で、日本を禮讚する人が多いやうでありました。今日となつて見れば必らずしもさうではない。世界を歩いて見て、日本程恵まれてない處は餘程尠いやうである。風景が良いと云ふけれど、風景の良い處は多く貧乏な處であり、景色が良いと云ふ處は必らず不便な處である。沃野千里と云ふ處に良い景色がある筈はない。斷崖絶壁などは、米一升取る事も出來はしない。景色が良いなどと誇り、良い景色であるから國が恵れて居ると云ふけれども、それは詩人や歌詠みには恵れて居るかも知れないが、一般國民に對しては、斷崖絶壁などは大禁物である。さう云ふ譯でありまして、案外日本人は自分の國を買ひ被り、詰らない處を偉さうに書いたり、人の困る處に非常に感心したりして、感心の仕處を全然間違へて居ると思ふのであります。唯だ然し此の天然に恵まれてない國に於て、一つ大いに恵まれて居る處のものがある。夫れは日本の歴

史であります。又た歴史の中で最も恵まれて居る處のものは、萬世一系の皇室であります。是れだけは如何云ふ仕合せであるか、我々は羅馬、希臘の歴史から、英吉利、亞米利加、獨逸、伊太利、佛蘭西、其他の國の歴史を調べて見ても、何處を捜して見ても、我が日本のやうな歴史の存在する處は一つもないのであります。是れは我が日本の誇りであり、我が日本の頼みであり、又た我が日本の力であると信ずるのであります。此の歴史を閑却し、此の歴史の中樞である皇室を閑却して、さうして外に日本の誇るべきものが何がありますか。私は晩學であります。色々研究した後日本人の思想の根本的中樞は、即ちこゝでなくてはなるまいと云ふ事に考へ付いたのであります。そして私の初めの歩き出しは此處であつて、此處から色々と迂回して漸く日本と云ふものは、此處にあるといふ事を考へついたのであります。寧ろ或點から申上げますと、私は甚だ是等の事に就いては遅く考へたのであります。世の中には私より早く考へ付いた

人があるかも知れない。然し私は色々の處を巡禮して廻はり、色々の家を訪ねて、始めて此處が我が宿であり、我が家であり、即ち我が墳墓の地であると云ふ事を發見したと云ふ譯であります。茲に私は私の研究の未だ足りない處があるかも知れませぬが、私の見た日本の歴史の特色の、二三を申上げて見やうと思ひます。

六 皇室と國家的大運動

我國に於きまして、あらゆる國家的の大運動と云ふやうなものに就て見ますと、常に其の運動の中心點となつてお出でになり、其の運動の根本的力となつてお出でになるものは、悉くとは申しませぬが、殆んど皇室、即ち時の天皇若しくは皇族であらせられるのであります。例へて申しますれば、神武天皇の東征の如き、是れは申上げる迄もありませぬが、其他日本を統一する事に就て御力を加へら

れた崇神天皇、若くは景行天皇、更らに日本武尊、かう云ふ御方々を除却して日本の上古史と云ふものが作れますか、日本の上古史と云ふものは、殆んど天皇及び皇族方の歴史と申しても宜いのであります。

其れから日本に於ける文化史の最も重大なる處の頁は何かと云へば、聖德太子——若し日本の文化と云ふもの、個人に負ふところの最も多大なるものは誰であるかと云へば、聖德太子であります。然るに其の聖德太子は何人であらせられるか、皇族である。又た日本の法律制度一切の立法的の事に於て最も負ふ處のものは何處にあるか、天智天皇であります。天智天皇はどなた様であられるか、斯くの如く日本に於きまして、總ての運動の中心となつて居り、根本になつて居るものは皆な天皇と皇室、即ち天皇及び皇族であらせられるのであります。我々は始終皇化六合に洽く、皇德四海を照すと云つて居ります。之れは支那人流儀に殊更に面白い文句を作つてさうして、おべつかを云ふのでは御座いませぬ。之れ

は事實其の通りであります。所謂る歴史的事實を並べた明白な間違ひのない事實であります。

本日も御當地の楠公の社に詣りましたが、私は南北朝の歴史を書く人々が、非常に間違つて居ると思ひます。楠公は無論偉いのであります。私は決して楠公を偉くないなどと云ふ事は申さない。然しながら楠公をしてあれ程迄に忠義を盡させた處の、後醍醐天皇と云ふ方は實に偉い御方であります。南北朝の歴史を書く人は、足利の事は書いて居る、新田の事は書いて居る。其他色々の人を書いて居りながら、其の中心人物であらせられた後醍醐天皇と云ふ御方に就て殆んど忘れて居る。そして偶々後醍醐天皇の事を書けば、後醍醐天皇の御缺點、御失徳を書いて、楠公の云ふ事を御聴きにならなかつたとか、尊氏に對して餘りに御寵愛に過ぎたとか、御缺點だけを書いて居る。然しながら私の觀る處では、後醍醐天皇と云ふ御方は、御人物として總ての點に於て、當時に於ける第一等の御方

であらせられるのである。唯だ御缺點を申せば、當時後醍醐天皇を輔佐する程の偉い御家來がなかつた事である。則ち天皇が餘りにお偉くて、家來の云ふ事を御聽きになる程のことはなく、御家來は皆な秘書官とか、御附武官とか云ふ位の程度であつて、丁度明治天皇が伊藤公を用ひるとか、若くは山縣公を用ひるとか、岩倉公を用ひるとか云ふ意味に於ての御家來がなかつたので、或點から申しますれば、後醍醐天皇が圖抜けて偉過ぎたと申し上げた方が宜いかも知れませぬ。其れが天皇に取つて眞に御不幸であつたのである。若し藤原親房と云ふ人が、せめて岩倉公程の人であつたならば、南朝の歴史は餘程違つた歴史になつて居たかも知れませぬ。私は其等の事を思うて眞に残念に思ふのであります。

七 維新回天の偉業と孝明天皇

明治維新の歴史に就て考へて見ましても、——此處には薩長のお方もお出であら

う。或は舊幕のお方もお出でにならうし、色々の方面からお出でのお方もありませうが、皆んな中心點を忘れてしまつて居る。成程吉田松陰は偉い、西郷南洲若くは橋本左内、藤田東湖、水戸烈公、何れも偉い人で、それ等の偉い人が維新には澤山居つた。然し維新の大業をあそこ迄持つてお出でになつた中心の御方は、どなたであるかと云へば孝明天皇であらせられるのであります。孝明天皇と云ふ御方は實にお偉いお方であつて、歴史を調べると調べる程お偉いのが分るのであります。御承知の通り孝明天皇は十七歳から御位に御即位になつて、二十年間世をしらしめされたのであります。其の二十年間と云ふものは、殆んど一時も御安心になつた事はないのであつて、二十年間人生の苦を、満喫遊ばされた御方でありませう。歴代の天子様で、恐らく孝明天皇程御苦勞なかつた御方はなからうと思ひます。實に私は偉い御方であつたと思ひます。十七歳で天子様に御成りになつて、宮中から滅多に御出で遊ばされず、漸く外にお出で遊ばされたのは、

御承知の通り安政の大火で御所が焼けたからであります。聖護院に行幸になつた、加茂に御出ましになられた、後から桂宮に漸く假皇居が出来、そこに御出ましになられた、それ丈けであつたのであります。而して御考へは始終國の事より他になかつたのであります。

私は常に孝明天皇の御宸翰を拜讀する毎に涙が出るのであります。近衛公に御出しになつた御宸翰には「お前の所に本屋がよく這入つて行く、無論田中と云ふ本屋であらう——田中何とか云ふ本屋は、多分東京にある文求堂の先祖であらうと思ふ——其の古本屋が這入つて来るさうだか、自分も古本が欲しいから、どうぞ自分の方にも寄越して貰ふやうには出来まいか」と云ふやうなのがあります。さうして出来る事ならば、斯う云ふ本を借りて呉れと云ふやうな事が、其の御宸翰の中に書かれてあります。其れから又た刀が大變お好きであつて、随分お氣に召した短刀が來たけれども、如何も値段が高くて困るから、何とか本願寺に相談して

本願寺から金を用立てるやうな事になるまいかと云ふ、近衛家に御相談になつた御宸翰もあり、其の金もどうぞ公然とではなく直接手許に送つて呉れ、會計の手に渡れば少し迷惑するなど、云ふのがありまして、其等のものを拜讀して見ますると、何とも申上様がありません。御承知の通り其の時の御膳などは、殆んどきままり切つた御膳で、肴などは腐つて召上る事が出来なかつたのであります。仕方がないから大概宮中で小さな鍋に、一寸寄せ鍋のやうなものを拵へて差上げ、夜召上つて是れは美味いから朝も食べる、残して置けなどと仰せられて、召上つたと云ふやうな事もあります。又た御酒なども始終酸ばいのを召上つて居られた。近衛家が伊丹に知行所があつて、伊丹から良い酒を取寄せて差上げたら、非常に美味いと仰せられ、甚だ赤面ではあるが、もう少し貰ふ事は出来まいかと云ふ御宸翰もあります。色々さう云ふ事を拜見致しますると、畏れながら衣食住にも御充分でなかつたやうに窺はれますが、然し其間に於て始終考へてお出で遊ばす事

は、常に御自身の事ではなくして、天下國家の事であらせられたのであります。御承知の通り何時でも朝は鶏鳴にお起き遊ばされて伊勢に向ひ、どうぞ此の國が安かれと御祈禱になられたのであります。其の事は吉田松陰先生の山河襟帯云々の詩に詳しく書いてあります。吉田先生などが、あゝ云ふ風な志を起したと云ふものも、畢竟孝明天皇が天下に向つて、さう云ふ難有き模範を御示し遊ばされたといふ事を知り、奮ひ起つたのであつて、天下の志士の心を動かした處の根本は、即ち孝明天皇がお作りになられたのであります。若し「維新の大業など、云ふものは、薩長の人々とか、其の他偉い人が一生懸命にやつて、其れを皇室に献上したのであつて、皇室は唯だ其の天下の志士が造り上げた維新の大業を受け入れられたのである」と云ふ人があれば、其れは根本的史實の誤りであつて、維新の大業を作るやうにして御遣はしになつたのは皇室が元で、其れが爲めに天下が動き出したのであります。其れに就ては猶ほ詳しく私も研究した事があります。今夕は

其處迄申上げる時間が無いから申し上げませぬ。私が常に考へて見まするに、日本に於ける大運動の主なる原動力と云ふものは、尠くとも皇室が元になつて居られます。獨り國民と共に動くといふばかりでなく、常に國民を率ゐて居り、國民を導いて動かし、リードして居られると云ふ事は、私どもの忘れてはならないと思ふのであります。維新の歴史にあつては猶更の事であります。是れは申上げる迄もない事ですが、近々『明治天皇紀』が出来ますが、其れを御覽になつてもお解りであらうと思ひます。私の見ました特色の第二と云ふのはそれであるのであります。

八 英國の權利思想と日本の義務觀念

其の次ぎに、私の如何も不思議に思ふ點があります。其れは決して私自身の手前味噌ではありませぬが、英國あたりの歴史と云ふものは、所謂今日流行して

居る處の争ひの歴史であります。争ひと云ふものは何から起るかと言ふに權利から起つて来る。即ち權利の争ひであります。而して其の争ひの歴史と云ふものは、必ずしも其れが悪いことではないのであります。英國の歴史に於きましても、御承知の通りキング・ジョンが當時の貴族に強要せられて、ランニメードに於て所謂大憲章を制定したと云ふ事其れが初めであります。或はチャールズ一世の時、或は千六百八十八年の革命の時でも、英國の歴史は第一は貴族と帝王の争ひ、第二は帝王と地主と協同して貴族に對する争ひ、第三は貴族とそれから中流社會との争ひ、第四は中流社會と労働階級との争ひ、斯う云ふ風になつて、徹頭徹尾争ひと云ふ事、即ち權利の主張と云ふもので一貫して居るので、流石の英國も實は少し争ひに食傷して居るのであります。

先年英國に起つたゼネラルストライキなどは、所謂英國流儀の争ひを極端迄持つて行つたものであつて、其の争ひには流石の英人も困つたものであると云ふやうになつて居るのであります。元來英國人は何が本領であるかと云へば、權利思想が本領であつて、其の本領と云ふものは、個人の權利と云ふ事を頻りに考へて居たのであるから、労働階級が盛んになり、従つて労働階級と労働階級の主張と云ふことを考へ、次ぎに此の如きゼネラルストライキと云ふものが起つたのであります。今日では御承知の通り英國の労働階級が非常な勢ひになり、其の爲め大概の金持は英國から逃げて行き、又た金を持つて居るものが段々他國に逃げて行き、寶物や何かは皆諸方に散つて消えるやうであります。即ち先づ物が逃げ、次で人が逃げると云ふやうな事になつて居るやうであります。

此の間ロートロイドの話が倫敦『タイムズ』に出て居つた。其れを讀んで見ると、近頃英國には失業と云ふ一つの業が出来て、失業者と云ふ一つの商賣が出来た。即ち業を失ふと云ふと國家に要求して、俺どもを食はせると云ふ一の商賣が出来て居る。之れが一のオキユペーションとなつた。珍らしい事であると云つて居る

のであります。元英國と云ふ國は、自分の腕に自分を頼むと云ふ事が唯一の本領であつたが、餘りに權利々々と權利を主張し、働らかずに食はして貰ふやうな權利を主張する様になつた爲めに、失業と云ふ商賣を試みたのであつて、之れは餘程考がふべきことであります。

英人のペーカーの書いた『亞米利加は何故盛んになつたか』と云ふ本の中に、英國が何故に衰へたかと云ふ事も書いてあり、又た英國が今日第二流國に落ちて行つた原因に就て色々研究してあるのであります。其中に英國人の權利思想と云ふものは變に間違つて來た。其の變に間違つて來た事を何處迄もやつて行つた結果が、遂にさうなつたのであると云ふやうに書いてあるのであります。元來英國人の權利思想と云ふものは、英國を世界一の國にしたものであります。其の持つて行く處が間違つて居た爲め、段々英國を衰微させて行くのでないかと思ふのであります。是れは餘計な話で英國が如何ならうと、我々には餘り痛痒相關する處は

ないのであります。序でありますから申して置くのであります。

然るに日本の歴史は其れが英國とは逆に出來て居ります。日本は權利思想よりも寧ろ義務觀念から踏出して居るのであります。即ち日本の歴史を總體的に考へて見ますると、日本の皇室には始めから終り迄、人民を大切にすると云ふ一の觀念が一貫して居られる。所謂大御寶と云ふ言葉を昔から考へて居られる。百姓を寶と思つて居られる。而して其の寶と云ふものは、所謂御先祖様から預つた處の日本國、其の日本國に生れたところの寶であるから、是れを大切に保存しなければならぬ、撫育しなければならぬと云ふ御考、それが徹底的に皇室の始めから終りまで貫いて居られると思ふのであります。

此點につきましては、私が一々例を擧げて申上げる迄もありませんが、皇室が最も式微して御所の内の燈火が三條の橋から見えたと云ふ後奈良天皇の時、御承知の通り非常に疫病が流行致しました。處が天皇は之れは皆な朕の不徳の致す處

である。何んとかして此の疫病を拂ひ除けやうと、特に『般若心經』を御書きになりまして、其れを諸方に御奉納になられた。其の『般若心經』は今國寶となつて保存されて居るのであります。是は唯だ一つの例を挙げたに過ぎませんが、さう云ふ事は澤山あるのであります。

又た人民も未だ曾て皇室に向つて、弓を引いたと云ふ事はないのであります。日本の歴史にも争うた歴史がないのではありませぬ。皇族と皇族との争ひ、又た人民と人民の争ひはあつた。然し日本の歴史上に於て、私は未だ曾て日本の人民と日本の皇室との争ひと云ふものを見た事がないのであります。是れは實に不思議な事であつて、人民は初めから皇室に忠勤するものと心得て居るし、皇室も亦た初めから人民を撫育するものと考へ遊ばされ、畏れ多い事ではあるけれども、天子様は殆んど義務の御觀念を天職と遊ばされ、人民の方はどこ迄も奉仕すべきものであると考へ、其れがずつと古今に貫いて居るのであります。是

れが一つの特色ではないかと考へるのであります。

九 日本國民の特性

其の次ぎの特色の一つは、日本人が排外的でないといふ事である。其れに就て私に日本人を不思議な民族であると思ふのは、日本人は胃の腑が大きくて、時としては黒鯛、時としては河豚と云ふやうな、悪いイカ物食ひではないのか、又た少し食べ方が大過ぎはしないのか、何でもかでも食べると云ふ欠點はありはしないのか、苟くも目の前に持つて來れば、何でもガブリと喰ひ付く民族ではないのか、若しさうした民族であるとしたら、ケ様に物を食べる民族は世界にはないと思ふのであります。御承知の通り鰯と云ふ魚があります、何を眼の前に持つて行つても直ぐに食べる。如何も日本人の先祖は鰯ではなかつたらうかと思ふのであります。其れで日本人を排外的だなどといふのは非常な間違ひであります。日本人の

排外と云ふのは、日本人の或一部で餘り食べ方が強過ぎる、隣の奴は如何も食傷して困る、俺共は少し扣へようと云ふ意味の排外であつて、決して初めからの排外ではない。他のものが餘りに取入れるから、是れでは困ると云ふので、他の一方が其の反動で幾らか差し扣へると云ふ其れなのであります。これが實のところ日本人の弱點である。

然るに此の國民をとらへて攘夷家だとか、攘夷の思想があるなどと云ふのは、其れは西洋人が云ふので、其の西洋人ほど排外思想の多いものはないのであります。事實攘夷家と云ふのは、寧ろ歐羅巴の人か亞米利加の人達を云ふ事で、日本人の如く終始世界を自分の仲間にするやうな考を持つて居るものはないのであります。是れは誇つて宜いのであるか、或は少し心配して宜いのであるか、如何も私には判らないが、是れが日本人の特色であると云ふことには疑ひはない。即ち時としては餘りに食過ぎたり、或は咀嚼せずして鵜呑にしたり、或は石塊でも砂利

でも、何でも呑むと云ふやうな事をしたりして、其の爲めに腸を痛めたり下痢をしたりした事も偶にはあり、國民的下痢の歴史は澤山にあるのであります。

そこで日本人の遣り損ひは、外國のものを排除したと云ふよりも、寧ろ取り入れ過ぎた結果であると云ふ方が適當であります。彼の耶蘇教を禁斷したと云ふが如き、あれは何の爲めに起つたかと云へば、餘り信長、秀吉が耶蘇教を利用し過ぎて手に負へなくなつたから、是れでは堪まらなると云ふので叩いた。初めから宜い加減にして置けば、叩く必要はなかつたのであります。何でも彼でもお前の云ふ事は聽いてやると云ふ事で、餘りに我儘が過ぎた結果叩かれたのであります。ですから寧ろ初めから寄せ付けないやうにして置けば宜かつたのであります。丁度餘りに人を可愛がり過ぎて其れが五月蠅く來るからと云つて門前拂ひを喰はしたと同じ事でありませう。私は是等の點に就ても此際宜く考へなければならぬと思ふのであります。

日本の歴史に就て、私は色々考察をして居る積りであります。そして、如何か此の恵れたる歴史を正統に書いて残して見たいのであります。日本人を導くものは、西洋人でもなければ、支那人でもない。日本人を導くものは、矢張り日本人でなければならぬ。又た日本人の頼るべきものは、支那でもなければ、西洋でもない。矢張り日本でなければならぬのであります。そして其の日本と云ふのは何であるかと云ふと、即ち日本の國史であります。是れだけは是非残して見たい。これが私の考へであります。私は又た日本の歴史に就て、常に其の弱點を考へて居る。日本人は元來が忠勇義烈の人間である。然し徹頭徹尾さうであるかと云へば、必らずしもさうではない。日本人にも却々不忠不義の人間も居るのである。日本人でさへあれば間違はないと云ふのは、丁度俺の家の子供であれば決して間違はないと云ふのと同じ事で、實際は善い家庭の子供程危ないのであります。親が品行端正であれば、子が端正であるかと云ふにさうは行かず、親の品行端正の反

動として、子の方は今少し推けて見ようと云つたやうな事もあり、其の反對は、親が餘り摧けると子はあれでも困るからと堅くなるといふ事もある。で、子の爲めから云へば、親は少し位は軟らかくなつた方が宜いかも知れません。さう云ふやうな譯で、世の中には反動と云ふものもあつて、却々一律にはいけないものであります。

又た日本人は大體に於てサウンドである。然し皆が皆さうと思ふと間違である。例へば御承知の朝鮮征伐の時の如き、彼の時分の朝鮮人は大變強かつたといふけれども、實際朝鮮人が強かつたのではない。凡そ朝鮮人の強かつた時は、日本人が朝鮮人の味方をして居つた時である。一口に朝鮮征伐と云つても、日本人と朝鮮人との戦ひばかりではない。日本人と日本人が、朝鮮で戦ひをして居る事もありませぬ。其れは日本の方の文書には詳しく書いてはないが、朝鮮側の文書には立派に書いてあるのであります。其の上日本人はおせつかいにも朝鮮人に鐵砲

の打ち方や、彈藥の造り方などを教へて居るのであります。彼の蔚山の籠城の如き、加藤清正がやつて居るのであります。彼の時にも矢張り日本人が寄手になつて圍んで居るのであります。日本人が如何して朝鮮人に加勢して日本軍に向つたか、それは不思議な様にお考へになりませうが、決して不思議でも何でも無い、明かな事實であるのであります。

朝鮮の文書を見ますと、加藤清正の家來共が朝鮮に降参して、加藤清正を討取る策を朝鮮の政府に建白して居ることがあります。其れに據りますと、加藤清正と云ふ男は獵が好きである。何時も足輕數名を連れて獵に出掛けるので、清正が獵に出掛けた時藪の内に隠れて居つて狙ひ打ちにすれば、必ず討ち取る事が出来やう、さう云ふやうな建白があつたので、其れを如何扱へば宜からうかと云ふので、朝鮮の内閣會議にかけた。其の閣議の筆記が、朝鮮の『宣祖實錄』と云ふ本に載つて居ります。どうも朝鮮人の考へさうな事でありませう。そこで筆記の議論を

讀んで見ると、日本人よりも朝鮮人の方が餘程深く考へて居るやうであります。「其の方法に依れば成程清正を容易に殺すことが出来やう。然し殺した先きは如何なるか、多分復讐をするであらう。加藤清正を殺したら黙つて居る氣遣はない、必ず其の仇討をするであらう。其の時は一層猛烈に彼等がやつて來やう、是れは矢張り殺さない方が安全であらう」と云ふ事になつて、清正は助かつたやうであります。其れでなければ清正の二條城の會見などはあり得なかつたのであります。さう云ふ譯で加藤清正の家來にさへさう云ふものが出た位で、戰國時代などには、随分日本の人心が荒んで居つたのであります。日本人でも、酒を飲んで酔狂するものもある。日本人だから、酒を飲んでも酔狂せんないとは云へない。日本人でも心が荒めば、色々間違つた事もする。現に御承知の通り數年前から色々の問題が、世の中を動かして居る。是れは何かと云へば、日本人の心が荒み、其の荒んだものが、各所に爆發して來たのであります。是れが

日本の本色ではないのであるけれども、荒めば悪くなる國民であるのであります。日本人にも矢張相當の弱點があります。其の弱點が附け上つて行けば、段々に悪くなる。そこで私は歴史上から考へて、日本人であるからと云つて決して安心する譯には行かない。我々は何處迄も國民を養つて行かなければならぬ。導いて行かなければならぬ。清めて行かなければならぬ。向上して行かなければならぬ。精進して行かなければならぬ。歴史の教ゆる處に依ると、斷じて油斷は出来ない

と云ふ事を痛切に考へるのであります。又た私は日本人に對して、時として嫌な國民ではないかと思ふやうな事もありま

す。吝ち臭い處や、迂濶な處や、其れが爲め聊か困るやうな事もあるのであります。然しながら日本人は非常な勇氣を持つて居る國民であります。又た非常なる彈力を持つて居る國民であります。一度良くなる時に於ては、英雄的心事を持つて――男も女も即ち英雄の腸を持つて居る。少くとも英雄的精神に共鳴するの

心を持つて居る國民であります。即ち多少の缺點は持つて居るとしても、此の國民には非常な勇氣のある事、彈力のある事、其の上に英雄的精神があつて、其の英雄的精神が國に向つては愛國となり、君に向つては忠勤となり、國家君國に對しては所謂獻身的精神となり、此の心が所謂東湖先生の『正氣歌』に光を放つといふ、即ち日本人の英雄的心事が時々閃いて來るのであります。我々御同様に亦た、三十七八年の役には其の精神が閃いたのであります。若し皆様が當時の事を考へになれば、如何に日本人が或點に於て、英雄的心事を持つて居るかと思ふ事を御會得になる事と信するのであります。私の日本歴史に對する考察と云ふものは、以上申し上げた通りであります。

此外尙ほ申し上げたい事も澤山あります。私が何故に歴史を書くか、如何云ふ風にして書くか、又た書いたものは如何云ふものを目的として居るか、云ふやうな事に就ても申し上げたいと思ひましたが、其れでは皆様方が御迷惑である。又た

一度に申上げてしまへば、此の次ぎの蘇峰會に来てお話しする種が無くなつても困る。又た幾許を残して置かなければ、再び来る勇氣がなくなりますので、此邊りで打切ること致します。

今夕は私の話が断片的になつて一貫した處がなく、定めて御迷惑であつた事と思ひます。話を聴く事のお上手な皆様であれば、私の申上げた精神だけは御汲取り下さる事が出来るであらうと信ずるのであります。是れだけで御免を蒙ります。

(昭和五年四月二十六日、蘇峰會神戸支部發會式に於て)

嘉永、安政と大正、昭和

一 緒 言

諸君、さきほど柴田君(徳治郎)は、東京の諸先輩を代表して、わざわざ御當地までお出でになり、こゝに皆様に向つて、私を御紹介して下さいといふことは、寔に忝けなく存じます。又た九州大學教授鹿子木博士は、如何にも周到な、又た眞摯な、私の殆んど考へ及ばざる點までも、私の精神を汲みとつて下さつて、それを皆様に御紹介して頂いたことは寔に難有うございます。

この花は(花環を指しながら)決してこれは葬式の花ではないと思ひます。これはやはり花嫁の花、花婿に對する花、いくらか將來に望のある花と私は考へてをります。私は實は、明治三十三年四月御當地に參りました。それは故伊藤公

爵、故井上侯爵が九州に下られた時に参りました。私は熊本の出身でございますからして、君も一緒に行けといふことでありまして、先輩の行かるところに私がかだまつて居るのもいかんと思ひまして一緒に参りました。そして熊本へ行つて引返して御當地に参りました。御當地で演説するといふことになつたのであります。ところが御當地に着きました晩に、大阪から急なことで、知らせが参りまして、それで一切を取消して只今福岡日々新聞副社長の永江君の御尊父永江純一君と共に——その時分まだ山陽線は出来な——船によつて周防の徳山まで参りまして、徳山から汽車に乗つて大阪に歸つたのであります。それで今夜の演説は、つまり明治三十三年四月の何日であるか、その夜にする演説を今夜續けてやるのであります。或る意味からすれば、永くなつて時効にかゝつてをる。或る意味から申しますと、永々と利息が澤山ついて居るのである。私のお話することが、果して利息の全部とは思ひませんが、一部分でも拂ふことが出来ますればともかく、或は一切拂

ふことが出来ませんが、どうぞ貴下方は前のことは時効にかゝつたのだとしてお取消を願ひたふございます。私を書くことは上手ではありませんが、聊か自ら信ずるところがあります。しやべることはとても否けない。殊に御當地には中野正剛君といふ非常な雄辯家が居る。私も豫ねて中野君の演説などはしばしば聞いて居る。とても叶はないと思つて居るのであります。それで今夕は私のお話し申すことは、果して貴下方の耳に徹底するか、甚だ私も自ら危ぶんで居るのであります。私も出来るだけ申上ぐる積りであります。とても永くは申上げられない。つまり短い間になるべく要領をつまんで申上げますから、靜に聞いて頂きたい。然し成程と思ふところは、手を叩かれても決して差支へない。

二 幕末期に於ける露英米勢力の侵迫

嘉永、安政から大正、昭和までの間のことは、ざつとつもりすすと七十年か八十年

であります。然しながら、この七十年か八十年の間、黒田侯が此方にお這入りになつた慶長年間から、ペルリが浦賀に乗り込んだ嘉永の末までの二百何十年間に比べますと、寧ろ前の二百何十年間が變化が少い。後の七十年か八十年が、變化が多いのであります。寒暑の順序といふものはどうしても決まつて居る。時として冬から夏に一足飛びに来るやうなことがありますけれども、それは決して常態ではない。夏から秋に、秋から冬に、冬から春にと來るのが、四季の順序であります。然し歴史的に物事の進みを考へて見ますと、なか／＼そうではない。時として非常にゆつくり歴史が歩いて居る。まるで蟻も踏み殺さないやうにゆつくり歴史が歩いて居る。歴史はのろまである。なか／＼動かない。徳川の上半期の如きそれである。のらりくらりした歴史である。

然るに歴史が、一旦飛出す時においては、飛行機に乗つて走るよりもまだ疾い。とても追ツつかない。それで普通の人は歴史といふものは、いつも同じ歩調で歩いて

ると思つて居りますけれども、それは人間といふものゝ生きたことを考へない話である。人間といふものは決して規則だつたものではない。つまり算盤ではなくやうに、人事といふものは行かない。歴史といふものは算盤をはなくやうには行かない。人間の考へ以外のことがあるのを知ることが、歴史の學問であります。それで若し日本人が考へた通りのがすつかり出來て來たならば、何も嘉永、安政の時になつて、さう騒がねばならぬやうになつたといふものは、どういふ譯であるかと云へば、自分等の考へ通りのことではなくして、外の變化があつたのであります。徳川家康なども偉い人である。然しながら徳川家康の考へは、黒田をどうしたら良からうか、島津をどうしたら良からうか、毛利をどうしたら良からうか、例へば黒田の抑へには近邊に小笠原といふものを置き、一方には又た久留米を置き、一方には佐賀を置くといふやうなことをやる。島津の抑へには細川といふものを置く

いふことであつた。日本だけのことは非常に良く考へて置いた。それだけならば百年経つても間違なければ二百年経つても間違ない。二百年経つて間違なければ一千年経つて間違はないわけでありすが、家康の考へ以外のことが出来て来た。それは何かと申しますれば三つの勢力が外から押しかけた。

第一の勢力は、皆様の御承知のロシアの勢力である。ロシアの勢力の東漸は、皆様御承知の通りで、ロシアが段々亞細亞地方に手を延した。シベリヤを取つて、オホツク海を取り、とうとう樺太を取る。千島、蝦夷といふところに顔を出した。それでロシアの方では、つまり目指すところは日本といふことになつて来たのである。このロシアのことについて、家康であります、東照大権現などといつて、自分は聊かも神様になるなんて思はなかつたでせうが、孫の時代では神様に祭り込んでしまつた。とも角東照大権現とまでなつた家康は、とうとう此事の見當がつかない。とうとうロシアといふ一つの勢力が出て来た。

も一つの勢力は、何んであるかといへば、それは英國である。英國も段々東方に力を伸ばし、印度を取り、海峡植民地を取り、英國の勢力は支那に及んで来たのであります。段々及んで来るその先は何處かと云へば、矢張り日本であります。それから今度はも一つの勢力は、何かと云へば米國である。米國は段々紐育の方から内部に進み、やがてはアラスカ、カリホルニヤで金鑛を發見するやうになり、メキシコとの戦争で、遂に太平洋沿岸のカリホルニヤを併呑するやうになつた。太平洋に船を浮べて見ると、落つくところは矢張り日本である。それで一方はシベリヤの方から日本にやつて来る、即ちオホツク海を経てやつてくる。一方は印度洋を経てやつてくる。一方は太平洋を経て日本にやつて来る。この三つの勢力が期せずして日本に集まつた。これは三つとも豫算外である。豫算外であるこの三つの勢力に壓迫されたのが日本であつた。日本人が一番先に眠をさましたのはロシアの勢力に對してである。

福岡に有名な龜井南溟といふ學者があつた。これは福岡人の誇りとする學者の一人であります。その南溟先生の友人である頼春水の息子の頼山陽が十七、八歳の時に作つた詩がある。即ちそれは『蒙古來』の詩であります。

筑海颯氣連 天黒

蔽海而來者何賊

蒙古來 來自北

東西次第期吞食

嚇得趙家老寡婦

持此來擬男兒國

相模太郎膽如甕

防海將士人各力

蒙古來 吾不怖

吾怖關東令如山

直前斫賊不許顧

倒吾橋登虜艦

擒虜將吾軍喊

可恨東風一驅附大濤

不使羶血盡膏日本刀

十七、八歳の少年が作つたところの『蒙古來』の詩を讀まれた龜井先生が、これは

面白いと自分でその詩を寫してそれを壁に張つて、そして酒を飲んでいゝ氣分になれば、良くその詩を吟せられたといふことであります。これは蒙古の事を山陽が詠じたのではない。龜井先生も蒙古のことに就て、それまで考へを催ふされたのではなく、恰かもロシアの勢力が北から來て、レザノフといふものがだん／＼日本に迫つて來た。最早ロシアの勢力といふものが、早晚日本の勢力と衝突するといふことを山陽も考へ、龜井先生も考へて、ロシアが攻めて來たならば、即ち昔の日本の武士が、蒙古人に對した時のやうに、やつつけてやるといふ意味のことであつたと思ふのであります。

これは一つの例である。然しながらこの三つの勢力がだん／＼進んで來た。こゝに形勢は急轉直下した。即ちこれが嘉永、安政のことでありました。

私は本日御當地に參りまして、取敢えず宮崎八幡宮に參拜致しましたが、皆様も御承知の通りに、宮崎八幡宮に「敵國降伏」といふ勅額があります。恐れ入つた話

でありますけれども、ペルリが日本に來た時の狂歌に、かういふ句があります。

宮崎の額の央ににの字書け敵國降伏ぢやない敵國に降伏

宮崎の勅額の眞中に「に」の字を書けば敵國に降伏で、その時の幕府の態度といふものが甚だあきたらなかつた態度であつたといふことを、その一句によく評してある。それはその時の日本國民の心であつた。この一句で幕府が倒れなければならぬといふことがよく解るのである。

世の中の人氣といふものは、人氣の變動といふものは、決してさう長文句じや現はれない。たつた一つの短いものでかういふ動きが判る。川の流れば大きな舟を動かすばかりぢやない。たつた一つの柴の葉が流れて行くのを見ても、川の流れるを知ることが出来るのである。その一句を見ても日本國民は、當時幕府の頼むに足らざるをよく知つて居つたことが解るのであります。

三 ペルリは日本の恩人乎

私はこの際に少しくお話を申して見たいと思ふものがあります。世の中ではペルリ提督をもつて日本の恩人と考へて、この恩人の銅像を横濱に造らうといふ計畫があつた。けれども平生私はペルリ傳も讀んで見た、ペルリの報告書も見た、ペルリに關することは可なり調査しましたけれども、ペルリを日本の恩人といふやうなことは、何處を叩いても出て來ない。アメリカ人からすれば、或はアメリカの恩人であるかも知れない。が、日本から考へて、私は決して日本の恩人とは思はれないのであります。

ペルリはアメリカ人の立場から云へば偉い男である。恐らくペルリ以後日本に來た人は澤山ありませうが、あれ以上の人はない。あの人は日本人は嚇すより外にないといふことを、すつかり看破つた人である。それで日本人がこの人にお目に

かゝりたいと、再三申込んで出て来ない。まるで神棚の奥にでも居る様な尊嚴を装つて居る。日本人を應接するには、下役をして應接させて居つた。それだからといつて、いざとなれば大に劍突くを喰はせた。幕府の役人には殆んど嚇すやうな挨拶をして居つたのである。そして彼はまづ小笠原島を取るといふ考へで、それから琉球を取る、臺灣を取るといふ考へで日本に臨んだ。小笠原島を取り、琉球を取り、臺灣を取つて、いざとなれば日本を襲ふと云ふやうな人を、日本の恩人と云ふことは、餘程これはどうも考へなければ解らないことである。恐らく考へても解らないと思ふ。アメリカ人が日本の眠りをさましたことが恩人といふことであれば、眠をさましたのは必ずしもペルリ一人ではない。今ではだん／＼鯨は減つて居るが、その時分は日本では鯨を獲ることが上手でなかつた。それで日本の沿海には、鯨がうよ／＼してをつた。丁度これから先の田の中の鱒のやうに、日本の沿海は鯨がうよ／＼してをつた。ことに金華山沖では船と鯨

がぶつゝ、かるほどで、それでアメリカの捕鯨船が鯨を追うて、段々日本の沿海に近づいて来た。房州の沖にやつて来た。館山の沖にやつて来たのであります。或はそれが函館附近にやつてくるといふわけであつたのであります。鯨の跡を追うてアメリカの船が、日本にやつて来た。アメリカ人が日本に来たといふことが難有い、日本に来たから恩人であるといふならば、一番先に頌徳表を奉るべきものは、ペルリでなくしてそれは鯨であります。鯨大明神であります。さういふ風に歴史を讀んで見れば、その動き方といふものが解るのであります。アメリカ人と云へば、何だか難有いやうに始めから考へて、アメリカ人であれば五光がさすかのやうに考へて、感心せんでもよいところに感心するのである。私はこれは間違つた考と思ひます。

四幕末の外交家

然るに後世の日本人はさういふ有様であるが、その時の日本人は未だ餘程氣が張つて居た。ロシア人に對しても、アメリカ人に對しても、嘉永、安政時代の日本人は流石に腰は強かつた。腰の抜けたやうな人もありますけれども、悉く皆腰抜けではない。抜けたものもあり、抜けないものもあつた。現にロシアから参りましたプーチヤチン、これは矢張り一種の豪傑である。プーチヤチンと樽俎折衝したものは筒井肥前守、川路左衛門尉があります。肥前守は私よりも老人で七十歳以上の老人であつたが、これがなか／＼手剛い樽俎折衝を、プーチヤチンとしてをる。川路左衛門尉などといふに、至つては實にこれは徹底的にプーチヤチンと樽俎折衝をして、なか／＼負けてゐない。その時に御當地には松平美濃守、即ち黒田家がその時分松平姓を名乗つてをられた。松平美濃守、黒田家の長溥公といふのがをられた。この人はなか／＼偉い大名である。この長溥公が川路と大變友達で、ロシア人と談判の時にはわざ／＼長崎まで行かれて、川路の相談相手となり、激勵された。その時に少し可笑しな話がございます。プーチヤチンが一度私どもの船に、一番偉いお方にお出で下さるやうにと案内をした。その案内について非常な評定をした。これは俺どもをだまして、そして船に乗せてロシアまで連れて行くのだらう。然し御馳走するといつて招んだのに行かないといふことは卑怯である。行けば必ず引張つて行かれる。どうしようかと非常な問題で會議して居る。その時に黒田の殿様が云ふには、お出でなさい。いよく連れて行かれるば、私が焼打をして先方を船ぐるみ丸焼きに焼いてしまふからお出でなさい。それぢや行かうといふことになつて、川路なんか死に、行くつもりで行つたら、船では非常な驩迎でシャンペンを抜いたり火酒をあけて色々に御馳走をして、今のシネマといふやうな幻燈をして見せたり、色々ことをやつて見せて、歸りには時

がをられた。この人はなか／＼偉い大名である。この長溥公が川路と大變友達で、ロシア人と談判の時にはわざ／＼長崎まで行かれて、川路の相談相手となり、激勵された。その時に少し可笑しな話がございます。プーチヤチンが一度私どもの船に、一番偉いお方にお出で下さるやうにと案内をした。その案内について非常な評定をした。これは俺どもをだまして、そして船に乗せてロシアまで連れて行くのだらう。然し御馳走するといつて招んだのに行かないといふことは卑怯である。行けば必ず引張つて行かれる。どうしようかと非常な問題で會議して居る。その時に黒田の殿様が云ふには、お出でなさい。いよく連れて行かれるば、私が焼打をして先方を船ぐるみ丸焼きに焼いてしまふからお出でなさい。それぢや行かうといふことになつて、川路なんか死に、行くつもりで行つたら、船では非常な驩迎でシャンペンを抜いたり火酒をあけて色々に御馳走をして、今のシネマといふやうな幻燈をして見せたり、色々ことをやつて見せて、歸りには時

計などの進物しんぶつをしたり、ビストルなどを進物しんぶつにしたりして歸かへへした。その時分じぶんは外國ぐわいこくのことは少しも解わからない。丸まるで手てさぐり足あしさぐり、座頭ざとうの橋渡はしわたりよりも危あぶないことである。然しかるにこの座頭ざとうは、杖つゑで探さぐりつゝ、行ゆくところまで行いかうといふ決心けつしんで出でかけた。それでも向むかうの連中れんちゆうは、輕蔑けいべつはせずして寧むしろ尊敬そんけいをしてをる。御承知ごしやうちの通りとほにブーチャチンの連つれて來た書記しよきには、ゴンチャロフがある。彼かれは有名めいな小説家せうせつかブーシキン、トルストイ、ツルゲネーフと列ならべられた偉えらい人ひとである。その人ひとがブーチャチンの書記しよきをして居をつた。即すなはち彼の書かいてをる紀行文きかうぶんを讀よんで見みると、なか／＼日本人にほんじんを易たやすく思おもつて居をないで感心かんしんして居をる。又また川路かはぢの書かきました日記にっきを見みますると、樺太問題かばと問題で、その時ときに樺太かばとを半分はんぶん日本にほんに呉くれといふことことで、口論こうろんをやつたが、ブーチャチンがどうしても聞きかない。又また幕府ばくふの方ほうでも、あまりさういふことをやかましくいふことを嫌きらつたので、そこで川路かはぢが憤慨ふんがいしたと自分じぶんの日記にっきに書かいて居をる。その日記にっきにかういふことを書かいて居をる。ブーチャチ

ンが俺おれのいふことに同意どういしないことは、これは樺太全體かばとぜんたいを吞のむといふ積つもりであらう。のみならず、彼かれは蝦夷えぞにも志こころざしがあるに相違さうゐない。然しかるに今日こんにちこの問題もんだいを片かたつけずに、曖昧あいまいにして置くといふことは、後のちに非常ひじやうな禍根くわこんを残のこすに相違さうゐない。俺おれが七十歳さじまでも生いきてをれば、必ずかならそのことが解わかるが、まことに嘆なげかはい。と、いふことを書かいて居をる。全くその通りとほである。御覽ごらんなさい樺太かばとの半分はんぶんは、漸やうやく日露戦争にちろせんさうの結果取けつこつた。始めはじめから半分取はんぶんとつて置おけば、次にそのまた半分はんぶんで全體ぜんたいを取とることが出来る。始めはじめ譲ゆづる、少しすこでも譲ゆづるといふことは決して響ひびむべきことではない。殊ことに外交ぐわいかうじやう上に於おいては、これ位くらゐのことは何なんんでもないといつて譲ゆづつたことが、後のちにはどうもかうも仕方しかたがないことになる。ワシントン會議くわいぎで主力艦しゆりよくかんの七割わたりといふところを、六割わたりに譲ゆづつた結果けつこが、即すなはち今日こんにちロンドン會議くわいぎの結果けつこになつてをる。その時ときに奮發ふんぱつすれば、今日こんにちそれ程ほど苦くるしい目に遭あふ筈はずはない。今日こんにちお前まへらが主力艦しゆりよくかん七割わたりを六割わたりに譲ゆづつて、補助艦ほじよかんを譲ゆづれないといふのは可笑おかしいじやないかと